『九州与次兵衛灘』（きゅうしゅうよじべいがせと）

角書「朝鮮細見」。明和八年（一七七一）正月二十三日　竹本三郎兵衛・中邑阿契作　豊竹座
近松門左衛門作、享保四年（一七一九）上演の『本朝三国志』の改作

※底本に従って表記や改行を行った。文字譜は、とくに必要と思われるもの以外に省略した。
底本：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（ニ 10-00313 ）
https://archive.waseda.jp/archive/image-viewer.html?arg={%22subDB_id%22:%2277%22,%22detail_page_id%22:%221:4807%22,%22image_no%22:%221%22,%22kind%22:%220%22}&lang=jp

※ニ 10-313、95 丁（飛丁 83～88　実丁 89 丁）

（1オ）
朝鮮細見　　九州与次兵衛灘　座本豊竹和歌三
能に因て禄を授功に因て官を與ふ則ば。敢て索
る事中莫らんとは管仲斉王に喩る言。此本朝に雄
飛の将真柴肥前の守久吉。猛威羊鹿を駆虎の
如く四夷八蛮も伐随へ既に干戈も戛れば。受禅の宮
は周仁親王後陽成院と号し奉り。百継八つの。
宇宙ヲロシ治り靡く時なれや。早青陽の初春

（1ウ）
を御迎へさせ給ひければ。群臣の諸卿佳節延年の慶
賀を奏し。今日踏歌の節会迎南殿に出御ましませば。当
今の御傅菊咲の中納言春貞卿。玉座の左に咫尺を連ね
常さへ花の九重に。猶十かへりの松の色。千代に八千代を寿きて各々。
拝賀をなしにけり。中納言笏を正し。南面に打向ひ。「例年の嘉儀として
吉野の国栖筑紫より腹赤の奏も相調ひ。弥御代を祝する
為踏歌の役人舞出。舞踏を急いで始めよ」と。官人を以て召るれば。はつと

（2オ）
調も所から。優に詭しき鼓の音打連。出る万歳楽。素襖の袖に舞扇
立並んでぞ。奏ける。徳若に御万歳と。君も栄へます。先正月の始りは。
薺太郎が孫ちやくし鹿に馬鹿に出立て。二月は如月。八幡山の御神事
お神楽を参らそ。卯月の末の花笠思ひくの玉手襷。つぼに入て。田を植
千町。万町億万町。君が御田を植ならべ。豊年の印は。八束穂が。咲た。く。四方に四方
の蔵を建。楽しかれ共。祝ふた。目出度御代の例なり。「よくぞく。清所へ参つて
一献給て休息せよ」と。仰にはつと両人が平伏したる庭の面。「真柴肥前守

（2ウ）
久吉参内」と披露させ。威義十分に立烏帽子。大紋の袖悠々と陛下に。
すさつて。一揖有。「今日の嘉節当今御受禅の後。始めて迎へさせ給ふ春陽の
節会。舞踏の役々例年のごとく相勤候なれども。元旦より今日に至る迄。

久吉が手の者に申付。禁庭の御守護として斯の通り。此両人も某が郎等。
岸田勘解由。今一人は九戸大炊と申者。踏歌に事寄警衛の為。参内致させ候」と
言上給葉中納言。叡慮伺ひ奉り。「今に始めぬ久吉の忠勤。君も甚叡感
ましまし。足下の勤功偏に。賞せすんば有べからず。別して先帝太上天皇より。勅諚
（3オ）
の趣謹で能聞れよ。四海一統に治りたる御感の余り。官位昇進を勧め。
君の御後見たるべしとの院宣。氏は即高冨と改め。大領の位に叙せらる間。今
日より昇殿し君を補佐し。万機の政を執行ひ。政務を沙汰する大領久吉。
玉座に咫尺候へ」と。春貞卿は座を立て進る詞謙虚に。辞する色なら。しづ
くと上る階いや高きけふより雲の上人に。備はる高冨大領とて。殿上人の
一の座に。威有て猛き其粧ひ。陛下に控へし岸田勘解由。九戸大炊も詞を揃へ。
おめでたやとぞ祝しける。春貞卿取敢ず兼て用意の白台を。久吉の前に押直し。
（3ウ）
「是こそ。大領の冠装束。御笏迄相添られ。恩賜給はる引出の品三つの数は
智仁勇。三徳に準へて政務を預け思し召。賜也」との給へば。謹で手をつかへ。「身不
肖の久吉。君命を蒙り。四海太平に治めしも。全く君の御仁徳のなす所。
其恩賞の御賜。只今より執柄の職に進し身の誉。此上や候べき。随がつて
執奏の趣。余の義ならず。前代足利累代より約諾有し新羅百済高麗
より。日本の貢怠る条。甚以て狼藉たり。万機政道関白。某其侭差
置んも謂なし。多年久吉が胸中に。思ふ子細候へば。人数を以て彼地に渡し征伐の
（4オ）
心ざし。此上は時日を移さず催さん。ヤヤく九戸の大炊。汝は渡海の船用意四国
九国に触流し。いづみの浦迄召寄よ。船手万事は汝が支配心へたるか。岸田勘
解由は兼ての通り。北野の森の大茶の湯日限は明々後日。表札を立触
知せよ。此年月国々の諸侯の軍功士卒の労を慰せんが為。一つには又民百性。
御代万歳の炳然を都鄙遠近しらしめて。安堵の思ひ是第一。先今日の
御節会。君が恵の御賜手づから戴く三徳の。名も高冨の久吉公。誉は大領大鵬
の雲井に羽を伸両翅。文武を兼し名将に果実備はる。大内山長閑き春こそ。【三重】久しけれ
（4ウ）
草も木も。靡く時代に。大茶の湯都鄙の好者が持運び。爰に北野の松
かげに。茶店は軽き萱蘆葺。柴の垣縄の扉竹の。笹葺苫をあらみ。大将の仮
家には北の御方夕柳御前。詫た藁葺風雅の軒。立ならんで岸田勘解由。麁茶
一服と差上れば。大将御機嫌斜ならず。都茶は禅学より出。心を世外の閑境に遊
ばしめ。維摩が方丈に准へ。囲ひを四畳半にかまゆといへども是は格別。遠参
触知せし所に。我思ふ心のごとく今日の壮観。年来の積欝一時に散ずる嬉しさ」
と。一入興に入給ふ。北の御方会釈有。「イヤのふ何より角より今日の天気と申。御大望
（5オ）
なる御催しお心に叶ふ段。此上もなふ存じますそれに付。申出すも気の毒ながらあ
なたのお胤を懐胎有し糸萩殿。三浦常陸之助へお預なされてより。都を出て何
国共。斯申自血を分し子迚はなし。お家の為には大切なお胤。どふぞ行衛をお尋有

て。お傍近ふ召るゝ様のお願ひ。偏に頼上ます」と機嫌をはかる柳訴詔。久吉公不興顔「扨々同し事を又願ひか。不忠の常陸之助われ達が構ふ事でなし。此後ふつく訴詔は無用。聞耳ない」と只一口に尖なる。日頃の気質に北の方重て詞はなかりける。折しも傍の仮家より加藤虎之助正清。御前に手をつかへ。「今日の御催し甚入興と

（５ウ）

存の外。常陸之助が不忠の御沙汰アヽ御遊覧の妨。御機嫌直しに夫く」と。差図を相図に立出る。曽呂利は異儀を改めて巾紗に茶碗目八分。しづく御前に奉れば。「ヲヽふく加減といひ手前といひ。連曽呂利出かした」と。仰にはつとつかへ。「ハア有難いお詞。兼てお咄聞ました三韓責の御門出。大唐米をこな微塵調合は山椒の粉。からりと煎たは唐入を祝する心。茶碗迄念入て高麗焼でござります」と。己が機転に弁舌も君が心を汲茶杓。木なりの曽呂利が軽口に。久吉首祝尾の御粧ひ。「ホヽ今に始めぬ曽呂利が利発出かしたく。此茶碗高麗の熊川。出陣の魁に。高麗

（６オ）

を手に取て一呑に飲だるは。勝利の先表疑ひなし。日本の陣所は九州肥前名護屋の浦。いかに勘解由。陣場の普請仮屋の差図は又追て。汝は普請の支配役心得たるか」と。仰をはつと押返し。「ハァ何事も主君の命畏つては候へ共。某も御内においては。人に知れた岸沢勘解由。御追罰の御供して高麗の魁は。拙者に仰付られなば。有難からん」と云せも立ず。「ヤア魁は先達て此正清が承はり。人数の手配り早用意」と。聞もあへず「何さく。すべて軍の先陣は侍たる身の望む所。若輩といひ。前髪立の御辺には役過る。」「イヤ異な事に前髪呼はり。諚意を以て勤る魁役過るとは緩怠

（６ウ）

千万。今一言いふて見よ」と反打て詰かへれば。勘解由も負しと膝突かけ。「ヤア身に向つて反打たは。見事相手にサア抜」と。同じく柄に手をかけて。詰寄詰よる二人が争ひ。是ぞ遺恨の基なる。両人暫しと久吉公曽呂利を以て押分させ。「伝へ聞沛公は漢朝四百年の家を起す。其謂を尋るに簫何と云一人の臣下都に留り。居ながら諸軍の兵糧秣つゞけ送りし功に寄。勝利を得たるは簫何が誉。此度の出陣に岸田を残すは我計略。越抜役と思ふべからず。又正清には魁を云付しも我めがね。互に遺恨を残すな」と実大将の厳然たる。下知の詞にハアはつと二人は拝聴なしにける。大将重て正清を

（７オ）

近く召れ。異国の出陣いつくと。今日迄猶予するも外ならず。彼土の案内地理の様子細見の図といふ物有。其絵図を所持せし者泉州堺に有と聞。元より渡海の便よき堺の浦。九戸大炊に云つけて船の用意も則堺。汝は是より立越て細見の図を尋求め所望の品によつて莫大の恩賞せよ。有無の注進有次第我も跡より赴くべし。早急ふれ」の御下知に。承はると虎之助千里も駈る勇足暇申て急ぎ行。早陽零も傾けば茶店の名残もけふ計。いざ帰らんと夕附く日数多の茶店を遊覧の。案内は岸田北の方。御大将に随ひて館を。

（７ウ）

さして還御有。跡に曽呂利が伸欠び。さらば仮屋の茶器道具取かた付る折も折。九戸大炊が跡に付お船頭の与次兵衛か。君へ目見への麻上下。曽呂利が夫と「アヽ遅いく。我君はたつた今早御立」と夕間暮。黒はべつたり顔の痣隠れまがひも

北の森。大炊を先に辰巳なる聚楽をさしてぞ。【三重】行末の。逢ぬ夜すがは一里
が千里。逢て戻れば千里が一里。千代を夜に寝明して飽ぬぞ色の名にしあふ。
里は乳守の幾夜さり。軒の火かげを目印に恋の入船漕付る。堺の浦ぞ賑
はしき。暮を相図に乗物を。斯と案内に亭主が袴。そりや大尽の御入と夕紅ゐ
（８オ）
の前垂に。出迎ふ仲居も立騒ぎ槌で俄のお成座敷。直に輿込庭先に
水打露の玉箒。小磯様へしらせの使。早ふ銚子よ煙草盆。お手が鳴
尾の奥と口。外はぞめきの人絶なく遊び廓の竪横を我物顔の男
作万が市介蘇鉄の針兵衛。此頃人を投頭巾いかつがましく入来る。何と市
介まだ出様が早かつたか。仲居のやつらが一人もうせあがらぬ。けたいじやないかい。ヲイ
やいとかくこつとらは。ゑらふ強ふ見へるかして。足音聞と井戸の鮒。ついと影を。
見せおらぬ。よはいやつは侭にして出会たいは弥重郎。ゑらいくと名代の男。
（８ウ）
小磯とやらが密夫じやとやい。ヲヽ夫も聞て居る。力も堺で一番切仲間はづれ
の一本立。妙国寺の蘇鉄と張合てけつかるはい。ヤアくあれく。南からくる道中は
小西が色の。小磯と見た。大かたばりめも来おるで有。中間の者へしらそじやない
か。ヲヽ夫がよからふ。サアこいくと。来た道筋へ立帰る。川竹の。其浮ふしに流寄。
里は乳守に養られ。今突出しの。太夫職小磯が派手な八文字。裾引
船に禿迄。一際目立大格子。高西が門にこがれ寄。内よりくはしやが是は
扨。恋の水上小磯さまお早いお出をおしらせと。奥へ行間の。其跡へ。小磯さまくと
（９オ）
呼かけて。曲輪眼眼馴ぬ女房が用事有げに立どまる。こなたは目早く
打黙頭。ちよつとあなたに逢間座敷の首尾をアイくく勝野と私
にお任せと禿を連て引舟のあづまは内へ表には「ヲヽ浜口のお岩殿
よふこそ来て下さんした。久作殿にもかはりなふ。」「アイ。お前様も御息災
でお嬉しや。けふはちつと此辺りへ用事に付。久作殿が参られます筈でござ
りますれど。御存の通り。口吃で人様に向ふて。つんと請答が出来ぬ故
私が名代。イヤのふ常住此通りでござります。」「ほんにそれくどふでこな様の
（９ウ）
世話で有ふなふ。どこしも男故に苦をするはいのふ。知ての通り男気の弥十
郎様。親御は生薬商売でも。其商売が嫌ひから明ても暮ても
喧嘩が商売。本に夫よ。そちの内へ預けて置た腰根は弥十郎様から預
つても。公界する身が大膽な仰山な腰の物。手元にも置にくし。夫でそちへ預
て置た。必大事にして下んせへ。」「アイそりやお気つかひなされますな。」「シタカ其事
に付てちよつとお耳へ」「イヤもふ日も暮ました内にも娘や久作殿が。待兼て居
られませふ。もふお暇申ませふ。」「是はしたり。折角寄て下んしたに。折が悪ふて気の毒
（10オ）
な。」「アヽ何のいな。公界のお身はいつ迚も侭にならぬはしれて有。随分お健で。」
「コレ久作殿も心得て」と。辞宜も会釈もそこくに。別れて。こそは立帰る。跡見
送りてほつしりとイむ軒へそよと吹く風が告るか声々に。喧嘩くとわめく

にぞ。小磯ははつと胸に釘。襠ひらりと足爪立。かたてや大方弥十郎様。アヽ
気つかひと身をあせる。内から亭主が「小磯様。奥のお客かお待兼。サアくお出
アヽこれせはしない。ちつと逢ねばならぬ人。ヲツト取ておりまする。お前の用と小
西様。見へたら首尾して逢せます。マア夫迄に顔出し」と。いへど小磯は案じ顔

(10 ウ)

心ならねど是非なくも連て。一間へ入にける。門はざはくそりや投たと。逃るか
来るか行違ふ。中に目に立弥重郎。親には久離気さんじに力自慢の
針兵衛市介。打付投付立はたかり「ヤイ蚊とんぼめら。ほでも立ぬ形をして。
おれにちつと立づいて見るのか。命しらずの猿松め。悪ふ動くと踏殺す」と。
人を人共思はぬ大胆。「こいつがく延過るがな。コリヤやいばりのぶんざいで。喧嘩を
商売の様にさらすたわけもの。夫故親の如清に追出され。彳みもない
儕が體。異見のために投にかゝつたのじやはい。ヲヽそれく宿なしの弥十郎め。

(11 オ)

追付ばつたりひろぐで有」と。いふに短気の弥十郎。「いはして置ば舌長
な。此ほうげたでぬかしたか」と。はり廻されて針兵衛が。襟しめかゝるをきぬかづぎ
前へどつさり投付たり。音に驚きかけ来る小磯。それと見るよりわけ入て。
「マアく待て」とさゝゆるを。刎退つきのけ双方が。むしやぶり付を寄付ず。
投飛されて二人の悪者ほうく逃て立帰る。続いてかけ出す弥十郎。小磯
は向ふ立廻り。「又かいなく珍しうないお前の喧嘩。コレ人の噂も構はずる。
古めかしい異見なれど。私が思ふ百分一。可愛と思ふて下さんすりや。責

(11 ウ)

て一つは聞入て。親御へ詫する気はないか。強いばかりが男じやない。ちつとは卑怯
な気も持てくれたがよい」と真実は。嘘のつかれぬ涙なり。「アヽおけく。愁いに
詫言して。ひよつと勘当赦されては後の身持が六ヶ敷。まだく五年も十
年も。投たり踏だりどづいたり。飽たら其時詫言せふ。勘当受たら親はなし兄弟はなし
一本立の弥十郎。気に入ずば年頃切。いまくしい」と又かけ出す。袖にすがつて
「待しやんせ。親御の事も思はぬお前。私が百千いふた迚聞しやんせぬは無
理ならねど。いかに異見が気に入ぬ迚。年頃切とは胴欲な。そも突出しの其

(12 オ)

日から外の男の肌しらず。ほんにほんぼの主様と。大事に。思ふ心から異見する
のもお身のため。まだ傾城と思ふてじや心が憎い聞へぬ」と恨涙も。可愛
さに歯がたは恋の極印也。弥十郎はましくしと。「エヽ又しても慢がちな。われ
ばつかりが惚た様に。思ひ合た心は五分く。喧嘩を好がこつちの負。ヤア夫はそふ
と此高崎屋へはどふして来て居る。ほんにそれを咄さにやならぬ。けふ爰の約
束は。座敷ばかりを勤る筈で。さつきにから来て居ますが。初対面の奥
の客折入て私への頼み。マア聞て下さんせ」と。詞なかばへ亭主がとつかは。「是はゑ

(12 ウ)

たり小磯様。奥のお客青瓦様。初対面から身請の相談。一大事を頼んだに。
何所へぬけた」と真赤におこつてござる消炭大尽。お前でなけりや納らぬ。マアく
ちやつと」ゝせり立ル。「アイくそこへ行程にお前は先へ」といふも聞ず。夫では済

ぬと無理やりに。引連奥へ行跡に。独むしやくしや弥十郎。「帯も解ぬ
奥の客。身請せふとは腹の皮。土客に土かぶらせおど骨とめてこまさふ」とかけ入向ふ
へ青瓦大尽。角前髪の置手拭座敷へどつかと押直り。「ホヽ聞及ふ弥十郎。
魂みがく男作。其男を見込頼たい一通り聞てくれふか。」「ムヽ初対面の此弥十
(13オ)
郎。頼みたいとは身請の事か。」「いかにも。」「マアならぬ。」「トハ又なせに。」「堺中に隠れ
のない小磯が間夫の弥十郎。望なら此前髪首。さらへ落して見受せい。目
の黒い内アノ小磯。脇へやつては男が立ぬ。」「イヽヤ小磯は此方望にない。」「ムヽそん
なら誰が見受を望。」「ホヽウ身共が望は三韓地理帝都細見の絵図。」「ヤア何
と。」「ソレ見受の金是へ持て。」はつと答へて伴作が刀脇指目八分。小西が前
に押直せば。思ひかけなき弥十郎。合点行ねば諸手を組。吐息つぎの間
立聞小磯いそく傍へ差寄て。「ヲヽ合点が行まい弥十郎様。アノ青瓦様とは
(13ウ)
仮の名。御本名は加藤虎之助正清様。」「ムウ其正清が名をつゝみ此二腰は何
の為。」「ホヽウ不審は尤。某こそ加藤正清。此度主君大領久吉公。異国退
治の御催し。近々出船有に付。三韓地理帝都細見の絵図。貴殿の
家に伝はる由。兼々久吉懇望なれ共。誰にたよつて所望の手筋。小磯殿
とは訳有様子聞を便に此仕合せ。何卒主人が望を叶へ。絵図を差上下され
なば。其恩賞は莫大ならん。ノウ小磯殿宜しく取成頼み申」と手を拱頭を下
ぬばかり也。小磯も傍から「コレ申さもしい勤の私に迄。お侍のあのごとく折入ての
(14オ)
お頼み。絵図をあなたへ譲らしやんすりや。其礼には大名になされんと。仰は奥
で聞ました。其絵図を差上て。夫を綱に立身有ば親御様のお悦び。お前も
兼て望の武士。よもやいやでもござんすまい」と。いへどいつかな見向もせず。「コリヤ小
磯立身出世を望まぬ空気はなけれども。此弥十郎が性根魂見定め。
侍に取立ふと有ば面白い。絵図がほしい計に侍に取立る。見所のない主人。マア
此方とんと望にない。何がなふても弥十郎は弥十郎。紙切便りに出世は
望まぬ。あた面倒な」と懐中より取出す一巻ずんくに引裂引さく短気
(14ウ)
者ハツト計に驚く小磯刀追取虎之助小西が前にぐつと詰かけ。「絵図を
望むは大領久吉。便に立たる加藤正清。礼義を知ぬぶこつ者。主人への申訳首
にして連帰る」と。反打かへれどびく共せず。「其刀抜中に手を遊ばして見て居よ
か。見事切ならサアく」と。大胆不敵の弥十郎ふんぢかつてぞ立たりける。もふ赦さ
ぬと抜放す。後の障子に声高く。「ヤアく正清早まるな聊爾なせそ」と押とゞ
め。一間の方より大領久吉。寛仁大度の其粧ひ悠然と打笑給ひ。「ホヽ聞しに勝る
遉の弥十郎。勇士の魂一言に見届たり。我細見の図を求めんと。主従斯迄
(15オ)
計ひしが。眼前其絵図を引裂。性根を顕はす汝が度量。万卒より得難き
一将一方の大将共成べき若者。今月今宵久吉が幕下に招かん返答いか
に」と仰有。「ムウ成程。お望の絵図は此通りずたく。弥十郎が性根魂。御所望

ならば抱へられましよ。」「ホヽ頼もししく。当座の恩賞十万石。墨付是に」
と御手づから。賜はる朱印弥十郎両手に取て押戴き。さつと披ひて読
終り。納る其手に取出す一巻。「これこそ誠の地理帝都。細見の図に候」
と。御大将に奉れば紐をとくく見改め。「黄石公に授りし。子房が六韜三略
(15ウ)
の兵書に勝りし此絵図ぞ」と。仰を聞て悦ぶ小磯。正清が安堵の思ひ。「ヲヽ、
逋々々小西殿。弥忠勤はげまれよ」と。勧めに勇む若君は。朝鮮国の果
迄も小西津の守行永と。其名を武士なり。大領猶も勇ませ給ひ。
最早此絵図手に入上。明なば直に出船の用意いかに」との給へば。ハツト伴
作手をつかへ。「お船頭の与次兵衛より。御窺ひは此伴作。御召の船は龍頭
鷁首。玉を磨いて飾立。当所の浦迄押出し。用意宜しく候」と。申上れば
御機嫌よく。とも船には銘々が家のしるし。前後の争ひなき様に。番手を
(16オ)
定め相待べし。急げくの御下知に。畏つて伴作は。船場をさして走り行。
大領重ねて。「小磯とやらんが誠有心ざしの神妙さ。里の住居も今宵
限り。委細は亭主に言付しぞ。心の侭にはからへ」と。仰は黄金の千両
箱。亭主が請込見受の沙汰。以後は互と虎之助又改る名対面。「御
征罰の魁は貴殿と某。人に越たる手柄をせん」と勇立たるあうんの
二王。年も姿も一対の角前髪の二人の勇士。頼もしくも又。いさましし。
久吉御座を立せ給ひ。早鶏鳴に程近し。月の入汐日の出汐艤ひを
(16ウ)
松浦潟肥前の国にて万事の差図。「小西は跡より追付べし。正清供
せよ帰らん」と早御。立の供触に。ハツト答へて御乗物。近習小姓徒若
党。二行に立て行列も。しづく勇みのきざみ足。御本陣へ」と。急がるゝ。
御立を待たる市助針兵衛。何がな小西に意趣がへし。小磯が身請聞伝へ用水
手桶に引さげく。女房呼だ海へぼつ込くくほつ込」と中に取まき詰かくる。
小西はぞくく小踊りし。「日頃の意趣打忝い。水はおろか石なり共祝ふ
てこちから返礼ぞ』と身拵する弥十郎。ソレとかけ声一時に暴破
(17オ)
てかゝる悪者仲間。一度にどつと鰯網。小西は鰭有大手をひろげ。唐
渡屋煎餅の徒党めら。襟物籠の拾ひ投。かゞんた海老腰車投
手を尽したる。働きなり。皆々うしの舌ふるひ。もふ叶はぬぞ鱶入すな。皆鯒
鯉」と逃て行。最早相手も荒男角前髪の色男。連立出る東雲や
我は廓の籠の鳥。遁る。門出首途を祝ふ小西が勇み足。廓の名残と
只一目。見返る小磯は嬉しさを語り逢たる夫婦連伴ひ。てこそ出て行

第弐

(17ウ)
住吉のお前の浜に網引する。海士の呼声引かへて。数の松明高提燈。
馳違ふ人声は。「御大将のお召の船波に巻れて沈みしぞ。お船頭の与次兵衛

を。逃すな捕へ」の声々は波の間にく囂し。渡海の船の惣支配九戸大炊。
家来引具し欠来り。「ヤアく者共。久吉公の御召船。過させしは船頭与次兵衛が
不調法。此大風に恐れもせず。纜ときしは渠借麁忽。水練の船頭
与次兵衛波をくゞつて逃延なん。浜手浦手はアノごとく。数千の人数が手
わけして。螺鉦太鼓を打立て尋捜すはきやつ一人。生捕にして高名せよ。
(18 オ)
油断するな駆立よ。急げく」と下知をなし。もみに揉でぞ駈り行。跡へどや
く浦手の猟師。百姓まじくら与次兵衛を。さがせくと大勢が。闇に礫の
お尋者。お祓いぶるしのお迎ひ提灯真先に押立く。面々得物の連枷
鋤鍬。中にも庄屋が智恵有顔。「何と皆の衆。どめつそふな此風に船
を出すといふ様な事がとこに有。そしてマアめつそふな。ついに顔も見しらぬ
船頭与次兵衛とやら。どんな者やらどんな顔やらあてどもない尋者。こなた
衆もそふであろ。ヲヽてや誰も知た者はない」と。いへば一人か分別顔。「行方の
(18 ウ)
知ぬは迷子同然。とかく惣々が声はり上。迷子の子の船頭の与次兵衛やい
と呼歩行たら。大方知そふな物じやぞや。サアくおれに付て皆ござれ」と。
いへば庄屋が「待やく。ソリヤつねの迷子の子。彼与次兵衛といふやつは。あ
つまが顔も見わすれてと。いふ様な山崎のやつし形のよはものではない。どめつ
そふにつよひやつ。ガ斯いふ中にも見つけたら。搦取て褒美にする思ひ
付でも有かや」と。いへば皆々口そろへ。剱術無双の与次兵衛が。大だん平で麦
秋の。はしかい働きしおる共。皆一様に連枷寄。与次兵衛こなすは連枷がちじや。
(19 オ)
コレワイナこりやさく」。我を忘るゝ其中に。目早き庄屋が「オツト待たり。それく
そこも又人が」と。見やる向ふへ二人づれ。提燈の灯に見合す顔。「ホウ榎津
の久作太義じやのと。いへば傍から六助が「ヤモあの人も役にさゝれてわせたれ
ど。口が吃で黙頭ばかり。ほんにそふじやの。爰らが庄屋の思案所。ヤコレく皆聞
しやれ。アレくくあの様に太鼓鉦で。ドンチヤンく祭りめいたお尋者を。だまつて
あるくは拍子がない。幸燈たお迎ひ提燈。吃の小哥と久作が。兵庫ぶしで
やりかけたら。ヘヽよかろじやないか」と無理やりに所望くと勧められ。むざんなるか
(19 ウ)
なお召の船は。ヨイく。彼に沈んでづぶくくと。ハアお笑止やく。笑止や是はいな。
「皆待ちやく。こりやおきつに化されはせぬかや。今夜はよつぴとあるかにやなら
ぬ。面々鼻毛をよまれぬ様に。穴のはたえへ唾ぬろぞや。ハヽヽヽ。唾気をぬるは
睫の事。ホンニそふじや。モウちつくり妖された。庄屋重代のなんばきび
忘れまいぞ」と。打笑ひ立別れてぞ。急き行。猶も四方に人の網。春辺
の海に風あれて。研に響く浦の波。されども命は天に有。運に乗じ
て船頭与次兵衛。逆波。渦まく海の面かき分く。刀を口に。立游ぎ。切取首を
(20 オ)
珠数つなぎ人なき。木陰に這上り。「年来恨は大領久吉。時待得たる今
夜の出船。折よく吹たる摩耶おろし。梶打折覆へし。底の藻と成たれ共。

水心有やつ原が我に敵とふしほらしさ。一々首を切捨く。流るゝ首を拾ふ中。暗さはくらし夫とあいろは見へね共。もし此中に猿冠者の久吉が首有な。日頃の本望嬉や」と。一つく透し見て。「こいつは何やつしかんだ頬。儕は何者痩た面三つ四つは白髪の首。こやつは出額さい槌天窓げほう頭四方鬢。剃下奴もそでない」と。海へさんぶり投込蹴込。「猿冠者はもらせしな。エヽ残念く去ながら。

(20ウ)

風にさからひ龍頭鷁首。思ひの侭に覆せば。やはか遁れは有まじき。ハヽヽハヽヽヽヽ心地よや悦ばし」と。勇んで立たる与次兵衛が。所存の程ぞ恐しし。又もや追々引連く捜せくと呼はりく。手毎に提燈追取かこみ。物こそ見ゆれと差出す明り。透さずばつたり切落せば。「スハ曲者よ。遁すな逃すな生捕」と。伝手に十手打ふる組子。与次兵衛やらぬと左右。沈んでかはせばすまたの十手。もぢつて払ふ小手落し。闇はあやなし盲打。むそう返し膝車手尽してぞいどみしが。水練計か手練の与次兵衛。打ふる刀の電光石

(21オ)

火。眉見なしわり大袈裟小げさ。渚は血煙砂煙四方へ皆々。逃趁る。何国迄もと大わらは。追行向ふに近付太鼓。南無三宝と引返す。こなたの浜手もかかい鉦の。音は同く数万の灯影我を捕手の人声に。さしもの与次兵衛動転し。行つ戻りつ只一身夫よく「遺恨は大領久吉一人。生たか死だか其安否。善悪を聞迄は大事の命。そふじやく」と独言。遁るゝたけはと討人の透間。北か南かに四によつこりと提燈提て久作が。出会頭に顔と顔。透しながめて与次兵衛が。テモよふ似たと只一口。提灯ばつたり打落し行方。しらず。【三重】

(21ウ)

成にけり。所は同し住の郷の松の葉越の月よりも。影幽なる侘住居久作夫婦が幾年か住ば。所の習ひ迚我一店を春めいた。畑の物種牛蒡種。西瓜。真桑の種迄も。ない子種と咄しの種。渡世は辛き蕃椒の。粉よりも砕く身過也夫は吃の口重く駕籠の片棒ない隙は。草履草鞋の手作りに。只居。洗濯すゝぎ物。女房が針手稼ぐ間も。手助になる独子の。お市は茶碗手に据て。出端一つと指出す。「ヲヽよふ気が付た。マアわしよりは久作殿。ヲヽムヽ娘かと手に取て。一口二口。ヲヽよいハヽ端香じや。カヽ嚊にもヒヽ一つク汲でこい」。アイくくと入折から。

(22オ)

所のあるき与五八が。案内もなくつつと入。「ホヽこりや二人ながら精が出るの。ヤアコレく。大切なお尋者が有て厳しい御詮義。訳はかうじや。今度大領久吉様。唐へ軍仕にござる所に。堺の浦から御出船。此間の大海荒。俄の大風でお船が引くり返り。大勢の家来衆迄行衛が知ぬ。によつて憎いは船頭め。見付次第注進せいと。即其船頭めが人相書が渡つた。コレ持て来たと取出し。名は与次兵衛といふ者コレく是見やしやれ。左の頬べらにでつかつと痣迄が書て有。よふ見て置。若胡乱付て来おつたら。こち迄ちよつとしらして下され。一廉褒美が出るといの。コレ金を貰たら半分配。

(22ウ)

エヽシタガ久作殿は吃で埒が明ぬ。ヤコレくお内義よふ見て置て下されやモフ逝ます是から脇へも此通り。触て置ふ」と与五八か。欲には爪も長咄し。絵図を大事と。出

て行。憂事は。つもる津守の里つゞき。小磯は夫の弥十郎が。出世も兼て預りし其一腰を又爰へ。取に廓の身も侭に。賑手な姿も所から。夫と目に立門の口。爰じやそふなと入来る。お岩が見付て是は扨小磯殿。マアくこちらへと伴ひて。夫婦が中に煙草盆。挽殻の火もふつゝかな。心計の饗応也。夫は吃黙頭ばかり。小磯は会釈馴々しや。「此程はお岩殿よふこそく。扨マア早速悦ばす事有て。わざく来たも外ならず。知ての通り

（23 オ）

弥十郎様。どふぞ心も直れかしと。異見した其人が。時の運は知ぬ物。お岩殿のござんした其夜もかへず。立身出世の知行取。わしも其夜に曲輪の見受さらりつと済しました。エヽヲヽ恟りは道理く。イヤもふ世界は案じる物じやない。意地くねの悪い弥十郎様。いつ人間にならんしよと案じ置は扨置て。夢見た様な二人が立身。高冨の久吉様。三韓へ軍の御供。夫に付て預た刀請取に来たはいの」と。聞て夫婦が顔と顔。エヽ。其刀をお前が取にと驚くお岩。「サア今迄は町の弥十郎様。是からは侍。刀をさゝせてお供にやる」と何の心も付ぬは小磯。始終聞入久作が。

（23 ウ）

俄に仰天色違へ畳叩て。「コヽこりや。ニヨ女房。今のをハヽ早とうろ付顔。お岩が胸にも刀の鐺。質にやつたを今更に。言れぬ思ひ。身は冷汗。兎角の諾はなかりける。女夫が驚く顔の色。小磯はつくぐ打ながめ。「二人ながら俄の当惑。扨は預けた一腰が。内にないといふ様な」と。うらどふ詞に漸と。久作が顔を上。物いひたげに頭をふれば。お岩がそばから引取て。「イヤ申小磯様。お前に向ひ入わけを。申も何とも恥しながら。今迄度々お文していふておこしなされた金。一度に五両三両づゝ。さいくの事なれども。いとしや誰しも銭金事

（24 オ）

他人にはいわれぬ物。お主也家来也。お文の来度々につかはした其金。御存の通のこちの内。預つた其刀かはりにやつては十両かり。又返しては廿両つもれば大方百両足ず。せんぼう尽てけふ此頃。どふぞお前に其断。申て来ふと往た所。途中の事也日は暮る。夫なりに戻りました。あの人にも呵られてなせ言てこなんだと。言しやるも尤。お前迚も公界の身随分お耳へ入まいと影ながらの御奉仕。シタガ今こそ其様に。さもしい勤のお身なれど。元は多々羅のお姫様。故有てお家断絶の後。母御様の御大病詮方尽て色里へ。お身を売せて程もなく。御臨終の

（24 ウ）

御遺言そち二人を頼との今はの仰が大切さ。術ない不自由はさせまいと是迄何もしらせませず。調へて上ました。金のかはりにノウ久作殿。サヽソヽそふじや。ネヽ根は。ダヽ大名のフヽ懐子。イヽいつでも。カヽ金はタヽ沢山なヨヽ様に。ナヽ何程ヲヽおこせく。ヲヽふみのク、来る。タヽ度々。シヽしんぜ。マヽましたじや。ソヽ其かはりに。ヤヽヽやりました」と。聞て小磯も「今更に弥十郎様から預つた其刀。そんな事なら此間にそふといふて下さつたら。何のく取にこぬ。ほんに女子の鼻の先。何の心も弁へも。そんならけふは其刀。弥十郎様へ返されぬか。ハアはつと計に当惑の胸押

（25 オ）

なでる計也。お岩も倶に胸撫おろし。「今久作殿の言しやる通り。賑手な勤のお前様。御不自由はさせまいと。続けて上た其金の。利足をかけて丁ど百両。けふ

といふては。ノウ久作殿。どふぞ四五日サヽマヽ待て。クヽ下されく」といはれて小磯が
又当惑何と言訳詮方も。泣くも泣れぬ身の難義。思ひ詰て立上り。表を
さしてかけゆくを。二人がとゞめてコリヤ何所へとお岩がとへば。イヤくく死るく爰はなして。
わしや弥十郎様に立ぬく。渕川へ身を投てと。ふり切裾を引とゞめ。メヽめつそふな。
く。コヽこなたを。コヽ殺して。ケヽ家来が。タヽ立か。く。夫でも生ては。サアくくどふぞし

（25ウ）

て今日中に。其刀を取戻して上ませふ。ヲヽソヽそれく。バヽ晩迄く。マヽ待しやれ
く。アレく。あの様に申されます。必短気な事して下さりますなへ。アとは言
ながらお道理く。どふいふても素性といひ。大名のお子じや物。金のなる木も
有様に。思召も無理じやない。申く。此お岩が。手を合して拝みます。どふぞ機嫌
よふ。お帰りなされて。お待なされて。下さりませ」と。涙ながらの詫言に。「サアそふ
してたもればわしも立。サイナ。立いで是がよい物か。どの様にしてなり共。ヲヽサ
コヽ心当が。ゴヽござります。く。ハヽヽ晩迄には。トヽ取もどす。く。アレあの様に申され

（26オ）

ます」と。お岩も倶に詫言の。詞に小磯が顔を上。「ほんに皆わし故に。夫婦の
衆の心づかひ死でも忘れぬ。嬉しいぞや。コレ久作。そんならわしは逝るぞや。晩と
いふては気もせかふ。翌の朝でも大事ない。戻しさへすりや済はいな。イエくく主が
あゝいはれるからは。晩迄には私でも。持て往て返します」と。一寸遁れに思案の戸口。
夫ならさらばと。表の方。出んとせしが立どまり。「シタカ必々気をもんで借銭のかはりにコレ
癪發して下さんな」と。いへど答へも久作は。唯うつとりと案じ顔。お岩が立て門の口。コレ申。晩
に私が参る迄。ヲヽ待て居わいのと。いへと心はすめやらぬ。跡の難義を思ひやり心残して

（26ウ）

しほくと乳守を。さして立返る。門送りして久作が。影見ゆる迄見送りく。「カヽ
必。キヽ気づかひ。ナヽなされますな。タヽ確に。コヽ心当が。ゴヽござります」と。いへど
答へも片便り。廻らぬ舌にぶつくと仏壇の戸は開け共。心の闇を御明しに。
硯引寄摺墨に涙は落て濃薄き。筆の立ども。泣沈む。「コレ久作殿。
こな様確に心当が有といふて請合しやんしたが。百両といふ金心当が有かいのふ。
ヲヽおれが。コヽ心当が。アヽ有といふたは。ミヽ皆。嘘じや。アヽあなたの。イヽ命が。タヽヽ
助たい。バヽばつかりじや。ヲヽ道理じやく。何の百両といふ金が。心安ふ出来る物で。

（27オ）

あなたを殺すまい為当座の間に合とは思へ共。もしやと思ふも金がない
から。ないといふてはどふも済ぬ。ヲヽおれも。シヽ思案が。ナヽないに寄て。コヽ此
通り。俗名榎津の久作菩提の為とは。そんならこな様死る気じやの。ヲヽく
シヽ死る。く。エヽ情ない事いふて下さんす。死で金が出来る事ならこな様ばかりじや
ないわいの。私も娘も何の生て居ませふぞ。親子三人命は三つ有けれど。
金の役には立ぬか」と。貞女のぐどくと叶はぬ。事の恨泣。娘のお市は
納戸よりしほく出て「申とゝ様かヽさま。わしやさつきにから何も角も聞

（27ウ）

て居ましたが。夫程金の入事なら。わしを乳守の女郎やへ売てやつてくだ
さんせ」と。いへば久作涙を呑込。「ヲヽョヽよふいふた。デヽ出かした。く。ソヽ夫に。ヂョく如在は

ない。ダヽ大事の。ヲヽヽお主様さへツヽ勤して。ゴヽごされば。ウヽ売てやる
ほど。ヨヽよけれど。三年跡の。ホヽ疱瘡。カヽ顔が。フヽ不器量に。ナヽ成た
コヽ此かゝと。ヒツ引くるめても。ゴヽ五十両にも。ナヽならぬはいく。そんならわしは
顔が悪いによりつて。女郎やへ行事はならぬかへ。コレ嚊様。どふぞ此顔の直る様
にして下さんせ」と。ぐはんぜない事聞に付母は気もきへ心きへ。ヲヽ子心にさへ

（28 オ）

其様に思やる物奉公しらるゝわしが身なら何のうかくして居よぞいの。
不器量の上に世帯じみひゞあかぎれに手足はあれる。わしが身でさへ
あいそが尽る久作殿。わしが器量のよいならば。こんな時の役に立で有ふ
のに。ふがいない女房を持たと嘸や口惜かろ。わしやこな様の手前が恥
かしい。娘といひ此母迄此よふに。悪ふも揃ふ物かいの」と。悔み歎けば倶
に目をすり。「ヤヽ役にも。タヽ立ぬ。ョヽよまい言。キヽ器量も。ヘヽ孫瓜もない。タヽ
高は。ビン貧乏が。イン因果じや」と。夫が悔めば妻娘。顔を見合す計にて

（28 ウ）

とかく。涙に伏沈む。表の方にはとくよりも内の様子を聞度に。黙頭く
取出す。百両包投込だり。夫婦は恟りコヽこりや金じや。ホンニ小判の百
両包。是は不思議と驚く親子。ホヲヽ驚きは尤と声をかけて打通り。「御覧の
通り遠国の浪人者。所用有て此の辺徘徊致し不図参りかゝりし此家の門
夫婦の愁嘆。余り笑止に存るから。幸に持合せし金子百両用立て進ぜたく推
参御免」と解紐の笠ぬぎ捨る面躰にでつかり痣は紛れぬ極印。お尋者の与
次兵衛とは名乗ぬ先にしられたり。夫婦は余りの嬉しさに手の舞足の踏所。

（29 オ）

一向夫は物得言ず只。ハツア。ハツとばかりにて畳に額を摺付れば。女房が引
取て。「御らふじます通吃で舌も廻らぬ上。嬉しい画一ぱいで。一向何にも得いは
ずに居れます。そしてマア。ついしかお近付でもござりませぬ私らに。大まい
のお金を下されまする段。忝いと申ませふか。有がたいと申そふか。わたしら親
子三人が命の親共氏神共。いふに言れぬ御厚恩」と手を合すれば。コヽこりや。
ニョ女房。ヲヽお礼はヲヽおれが。アヽ跡で。ユヽゆるりといふ。ソヽ其金で。カヽ刀を。
ハ早ふ。トヽ取てこい。く。ほんにマア此お礼はちやつきりちやつとどふお礼を

（29 ウ）

申さふやらマアく私は此金で」と。戴きく出行を。与次兵衛しばしと呼とゞめ。
「命にかゝる事なれば心の急は尤ながら。只一言某が。お身に尋る子細有。
イヤ別の義でもおりない。お身が夫の久作と某が此顔。よく似寄たか但しは似ぬか」と
差出す顔。つくく眺めて「ほんにそふおつしやれば。どふやら似た様にも有けれど。
まがはぬ所はあなたの痣。ムヽ尤」と腰に用意のやたて取出し。遠慮会釈
も久作がゑづかみ取てぐつと引寄。左の高頬へ覚の痣。「此入墨は我秘法
何と内宝。是では我に似よふがや。似ました確か瓜を割るずに生うつし。女房

（30 オ）

の目にさへ見違ふます。ムヽ夫聞たれば外に用なし。久作は奥の間で様
子とつくり言聞さん。案内しやれ」と与次兵衛が独呑込心の工み。打諾

て久作が。娘を連て奥の方。お岩は心いそくと質やをさして急ぎ行。
早暮かゝる表の方。所の代官丸岡丹下。内の様子を窺ひく。袖に用意
の呼子の笛。相図はとくより与五八が。納戸の内より忍び出。声を顰て
丹下様。ヲヽサ与五八最前の侍は弥与次兵衛に極つたか。いかにも左様。正銘
正真極印の付た船頭与次兵衛。裏から忍んで様子はとつくと。ホヽすりや

（30ウ）

与次兵衛に相違はないな。ソレ家来共ふん込」と。いふを押さへて「アヽ申お急なさ
るゝな。与次兵衛は与次兵衛でも。其与次兵衛が二人有。ムヽ何といふ。二人有と
はそりやどふして。サア一人は此家の亭主久作と申者。顔に痣を俄に拵へ
どちらをどふ共見わけがたし。そこを見分る工夫は彼。似せ者めは口が吃でござ
ります。何ぼ頬がよふ似ても吃るやつは似せ者。すつぱりと物いふが本の
与次兵衛。それじやによつてマアせかずととつくりと。吟味してよい時分には。
此笛を我等が相図。其時大勢込入て討て成共搦てなりと。与次兵衛

（31オ）

を手に入たら褒美は引かへ御合点か。ホウ夫はちつ共気つかひすな。然らば同勢諸
共に此家のぐるりに忍んで待。随分と吟味を遂必似せ者掴なよ。そりや合点」
と。黙頭囁き元の納戸へ与五八は。忍んで様子を伺ひ居る。斯とはいさや久作が。心
もくらむ黄昏の。時や移ると。霑れ出。門の戸口もさし足も。胸の思ひは
妻と子に。名残涙を打払ひ。「ヨヽ世の中の。タヽ宝と。いふは。キヽ金銀より。
ホツ外にはない。ソ其。タヽ大切な。カヽ金。イヽ命を。ヒヽ百両に。ウヽ売は。ウヽ売
徳。ヲヽおれが命。ウヽ売た。カヽ金とは。シヽ知ずに。ニョン女房が。ヨヽ悦んだが。

（31ウ）

イヽいぢらしい。ヲヽ不便な」と。暫し涙にむせびしが。「グヽ愚痴な。く。ヲヽおれも。サヽ侍のハヽ
果じや。リヽ立派に。ハヽ腹。キヽ切て。ミヽ見せふぞ」と。肌押くつろげ九寸
五分。抜より早く欠出る娘。「とゝ様死で下さるな」と。腕に取つき泣入我子。可
愛や路頭に立おらふと。思へば胸も張裂ばかり娘が。顔を打眺め。「コヽこりや。トヽ
とゝは。シ死ねば。ナヽならぬかい。ズヽ随分。ヲヽおとなしう。ナヽなつて。セヽ成人。シヽしてくれ。
カヽ可愛や。チヽ力が。ァヽ有まい」と。いふた計が精一ぱい。娘を引寄抱しめて見
れば見かはす恩愛の吃らぬ物は涙なり。夫とはしらぬ女房が。提し刀に気

（32オ）

もせかれ帰る門の戸打たゝき。「久作殿今戻つた爰明て下さんせ」と。いふ
に恟り久作が娘を突退。刃物取手に取付お市。「アレとゝ様が死しやるわいの。
嚊様早ふとめていの」と。いふ声聞て「ヤアくく。とゝ様が死しやるとはエヽ是。そんな
事いふ手間で早ふ爰を明てたも。サア夫でも明に往たら其間にとゝ様が
死しやる」と。腕に縋つて放さぬ娘。外には母も気はそゞろあせる拍子
に錠ばつれ転つまろびつかけ入て。「コレくくこな様何で死しやんす。死で叶はぬ訳
ならばなぜ此わしに打明て。いふて聞してくれもせず。留主の間に死ふとは。物

（32ウ）

思へとか胴欲な。モヽ尤じや。ドヽ道理じや。ワヽ訳と。いふは。ヒヤ百両。カヽ金で。イヽ命を。
ウヽ売たのじや。何百両の金に命を売たとは。どふした事でこなた

の命。百両に売しやんした。ホヽ其様子は某が。委しく語聞さん」と。障子開
けば船頭与次兵衛。腹一文字にかき切て。苦痛をこたへる其有様。「ヤアお前は
さつきのお侍。切腹は何故」と。驚く女房久作も飽て。詞なかりけり。
手負は深手にちつ共屈せず。「イヤ驚き召んな夫婦の衆。此切腹の其
子細。申て聞ん」と息をつぎ。元某は関東武士子細有て久吉に世を挾め
（33 オ）
られ。憤りやむ事を得ず。近寄て恨みをなさんと思ふに幸。此度異国
退治につき。九州名古屋へ出船と聞しより。是ぞ本望達する時節。
元より船は鍛錬の。我を誠の船頭と心をゆるし久吉が。乗たる船は龍
頭鷁首。住吉浦より纜とき。既に乗出す折もおり。武庫山嵐麻
耶おろし。吹しく風に漂ふ船。爰ぞ本望時得たりと。夕闇暗き折も
よく。楫。討折バくるくく渦に。巻れて召船の。近習の面々声々に。船を
戻せ漕戻せと呼はる声を聞捨に海へざんぶと飛入て。船底四五尺切穿
（33 ウ）
ば。目たゝく間も有ばこそ船。人くるめずぶくく。底の滓となしたれば。アヽフ心
能や。本望やと夕波風も烈しき海原游ぐ渚に。提燈松明。「大将の召
船に過させしは船頭の与次兵衛が叛逆に極つたり。討取射取と大勢が群
立中を切抜て。其場の難は遁れしかど。目ざす敵は大領久吉討もらしたる残
念さ何に類の。有べきぞ。夫よりは某が絵図をもつて厳しき詮義。此難
を遁れんには。身がはりをもつて欺んと。思ひ付しは久作殿。我に寸分替らぬ面
躰。其夜に思はず出合し顔。燈かげにすかして身置しも不思議の縁と
（34 オ）
跡を付。此家をとつくと見届置。けふしも来かゝる夫婦の難義。是幸
と用意の百両。二人にあたへ恩をかけ。のつ引させず腹切せ。我身かはりに
せんものと。扨こそ斯計ひしが。我を詮義の廻し者此家の内に忍び
居て。早計略を知たれば。所詮遁れぬ運命と諦めての切腹ぞ」と。息
も切さぬ強気の手負始め終の物がたり。様子をとつくと与五八が。納戸より
ぬつと出。「ヤア夫を見出そふばつかりに犬に成て入こんだ。遉は与次兵衛よい
覚悟」と。いふに久作「ヨヽ与次兵衛とイヽいふは。ヲヽおれじやく。ヲヽおれがクヽ
（34 ウ）
首。キヽ切た。く。ヤアしらばけめ何ほざく。頬は似ても吃が似せ者。腮叩くな」
と踏飛し。呼子の笛を吹立れば。待に待たる丸岡丹下つつと入。「ヤア与五
八。与次兵衛を討取たかいかにく。ハアヽお気遣ひなさるゝな。贋者の手目上
て。誠の与次兵衛に詰腹切せ置ました。ホヲ遉手柄。イテ首取ん」と
かけ入一間。「ホヽ運尽て切腹したる船頭与次兵衛。首取て手柄にせよ。ホヽ
弁舌の爽さ。真の与次兵衛ごさんなれ」と。首をはつしと打落し勇進ん
で丸岡丹下。与五八来れとしたり顔。役所をさして立返る。跡をとつくと
（35 オ）
久作が。一間入て死骸に向ひ。「ホヽ遉成久作。某が約を変ぜす潔
き此切腹。忝し共過分共。いかで詞の有べきぞ。只此上は未来の仏果。成

仏得脱南無阿弥陀仏」と合掌の傍に女房が不審顔。「コレ久
作殿。何じややらどきくと。どふやら合点が。ホヽ不審は尤。某こそ船頭与次
兵衛。そちが夫はアノ死骸」と。聞て恟り女房が行燈引寄とつくと見て。「本
にお前はお侍様。お侍はお侍じやが。アノ死骸を夫とは。そんなら吃は。ホヽ吃は元心
の臓の煩ひ。切腹の切先に心の臓を断切ば。自と廻る弁舌言句。衣類
（35ウ）
を差かへ我身がはり。エイ。すりや何と云しやんす。心の臓とやらを切た故。舌が直つ
て物が言れる。そんならお前はお侍様。此死骸がやつぱり夫の久作殿かいのふ。ハア。はつ」と其座
にどふど伏。「扨もく情なやさつきに内へ戻つた時。とゝ様が死しやんす
と娘が声に恟りにて。心せく故暗りでよふ似た故に夫じやと。思ふて居たは何事ぞ。唐
天竺を尋ても現在夫を取違へる。女房が又と有物か。嘸久作殿の今はには。不貞
節な女房じやとさけしんで居やしやんしよ。死で未来で逢た時わしや言訳を何と
せふどふぞいな」と声を上嘆けば倶に泣娘。「さつきにはアノおぢ様がとゝ様の着物着
（36オ）
てゞ有たによつて。やつぱりとゝ様じやと思ふて居たはいな。嘸さまこらへて下さんせ」と
縋り歎けば母親も。いとゞせき上せぐり上。涙の限り。声限り泣尽す。こそ道理成。涙払ふ
て女房が夫の死骸の刀を取。既に自害と見る与次兵衛。「ヤア死んとは何故に」と。
刀取手を「イヤくく放して殺して下さんせ。夫にせめて身の言訳。ハテ扨コリヤ狼狽者。
稚い娘を見捨るのみか。契約の此一腰。誰が残つて其主へ。返すくも夫へ追善
心得たるか」と手に渡す。刀の袋を取上て見るも親子が。涙の種。又も戸口へ
邪智深く立聞したる与五八が。「イデ注進」と欠行を透さぬ用意の種が嶋。
（36ウ）
どふど打込手こたへに。もろくも息は絶てげり。最早さらばと与次兵衛が心残して立
出る母と娘は。仏壇にかゝげ残せし燈明の灯かげも。細き松虫の鉦も幽に。
南無阿弥陀仏く。弥陀は西方極楽の花の臺に我夫の日頃念ずる
地蔵尊。未来を導き。たび給へ。此後誰を頼べき。歎きをいつか忘るべき
なまいだ。なむあみだ仏。くなまいだ涙。片手に娘のお市。「嘸さま早ふ
此刀。乳守の里へ」と。勧められ掲る刀の暫時も。放れがたなき夫の躯。捨行。
娑婆の有為無常救ふは。弥陀の誓願力心々に出でゆく
（37オ）
第三
犬馬の人を労則は帷蓋をもつて是を覆ふ況大切の人におゐておや。重んぜ
ずんば有べからず。真柴大領久吉公武威海内にふるひ。其家に有ずして
関白則闕の官に至。帝都を守護する聚楽の館戸さゝぬ御代と賑はへり。
時も春の御慰とはし近く出給へば。岸田勘解由を始めとしお小姓お傍の諸役
人。中に取分曽呂利が輕口。御機嫌取々様々也。大将仰出さるゝは「去頃住吉の浦に置
て。船頭与次兵衛といふ者。某に仇せんと計しを。不思議に遁れ。早速其与次
（37ウ）
兵衛は刑罰に行へ共。若同類の族も有んかと朝鮮国征伐も延引併先
達て申渡せし名古屋表。仮屋の普請出来次第出船せん。其旨諸士へ触聞せ」

と。仰にはつと岸田勘解由。「仮御殿の普請某が仰を蒙る故。増人歩を差下し
夜を日についで急くといへども。二百里に余る道ねれば何角心に任せず。延引の段近
頃恐れ奉る」と。身の誤りに言訳もしよけり切たる折からに御気に入の奥小姓桜井求
馬。何か仕落は白小袖。枝葉も枯たる一木の松。御前にかき据させ。其身は白洲に
手をつかへ「此鉢の樹は常世の松の実植。臼杵の宮の神主献上の名木御秘蔵

（38 オ）

有て私に預置れし所。斯のごとく一夜の内に。枯木と成段不念の至。不調法
千万申上べき詞もなし。此上の御哀憫切腹願ひ奉る」と。頭を下れば近習外
様。こは不吉成松の枯木。御機嫌の程察し入眉を顰る計也。岸田勘解由眼を
剥出し。「ヤア大それた事を仕出し。切腹とはのぶとい願ひ。松は千歳と寿く中取わけて
御秘蔵の常世の松。枯しもぼしたは我君を調伏するも同じ事。大罪なれば逆
磔覚悟ひろげ」と無法の詞。大将大きに笑はせ給ひ。「万物の長たる人の名松
ぐらひに替るべきか。譬ていがゞ典薬共が予が病気を療治して。本復なき迚切

（38 ウ）

腹せば奉公する医者一人も有まじ。況非常の草木。枯しぼめば迚何の切腹。
これしきに腹切て我馬さきで討死せんずる命。かけがへでも持たるか白痴者。遠
慮なく奉公せよ」と。寛仁大度の御詞。はつと領掌求馬が悦び。曽呂利御前へ
つゝと出。「此松の枯るとはやれく目出度やく。御祝義に一首仕らん。お小姓達硯
く」と。早御機嫌に大高壇紙。さらくさつと。斯計。「御秘蔵の常世の松は枯にけり。
己が千年を君に譲りて。ハヽ千秋楽」と読上れば。扨も詠だり祝ふたりと。皆方歳を
祝しけり。大将御機嫌うるはしく。今に始めぬ曽呂利が狂哥。不浄を払ふ妙文なりと。

（39 オ）

褒美をくれん坊主め望め」との給へは。「ハイイヤモ天窓のざりくから爪先迄。皆我君のご恩賞。外
に望は何もなし。去ながら御意を背くは却て憚。御祝義の印迄紙袋に米一ぱい。
夫か拝領致したい」と。聞て久吉打笑ひ。「扨欲のない菟入。望の通り得さしてくれふハアヽ有がた
し」と罷立休息部やに走入。兼て用意やしたりけん。五間に長さ十八間の紙帳
を引さげ走り出。「サアくくお小姓衆頼ます」と。紙帳の四方を引ぱらせ。「ハイお約束の紙袋」と。
云せも立ず岸田勘解由。「ヤア是がどこに紙袋。我君を白痴にするか狂惑
者」ときめ付れば。「ハテ扨。大きうてもちいさふても紙袋は紙袋。是を二の丸のお米

（39 ウ）

蔵に打させ。お約束の通り紙袋に米一ぱい。欲のない我等が望。ハイ有難ふ存し
ます」と一礼すれば。大将興に入給ひ。「ソレ次手に仕れ。はつと答へて取敢ず。千早
振。神代も聞ぬ紙袋。から蔵にして米貰ふとは。ヲヽ出かしたく。其哥は
立田川の。おのれはすつぱのかはなり」と御戯に伺公の諸士。騒き笑ひ賑はへり。
かゝる御機嫌能折と北の方夕柳御前。お局に案内させ。しづくと立出給ひ。「我君様の
異ない御機嫌と。局共が知せも嬉しく。其御機嫌よい折からに申上たい自かお願ひと。
聞もあへず「ヤア又躰捨丸か事ならん。又してもく聞訳ない願ひ事」と。不興に見ゆ

（40 オ）

れば猶もすり寄。「サア申出すと其様に。詞すげなふ御意遊ばせと。マア思ふても
御覧遊ばせ。今四海一統治め給ふ我君様。御世継の有まほしさは自始め。日本国

が願ふ所。幸とお部やの内。懐胎有し。糸萩殿。直に三浦常陸之介が預つて。御介抱
申中も。何卒御男子誕生有かし。姫ごぜ成共変生男子と諸寺諸山への
祈祈祷。其甲斐有て安々と誕生有し捨丸君。サア日本の礎御代長久は
万々歳。ハアヽ嬉しや有がたやと。六十余州の大名。悦びいさむに我君様は。打て
かはつて無法のお詞。誕生の捨丸首打て出せよと。思ひも寄ぬ御諚意は。鬼か蛇

（40ウ）

神の見入かといとしや夫を苦にやんで。糸萩殿は即時に最期。其身に成てはことはり共
道理共。思ひやつては自が。身もよも有れぬ悲しさつらさ。常陸之助か諫めも聞入させ
給はねば。詮方尽て三浦夫婦は。捨丸君を誘ひ参らせ。都を立退行衛しれず。かゝる忠
義の常陸夫婦心ざしにもめんじ給ひ。お赦しも有筈を。猶国々迄厳しいお尋。東西わ
かぬ稚子に何の憎しみ何の科。天にも地にもかけかへなきたつたひとりの御世継を。殺ふと
思し召君の心は嘸や嘸。深い御思案思し召有ての事とは思へ共。又自もなさぬ義理。そこの心を弁へ
給ひ。自か願ひの通り。捨丸君の命を助け。めでたふ四海の御世継と。六十余

（41オ）

州の諸大名も。安堵の思ひをさしてたべ」と。道理を尽し理を尽す。詞は実も淀川に水の流るゝ風情
也。大将猶も御声あらく。「ヤアいつ迚も同し諄。かけかへもない子を殺すは深い思案
と推量り。重ねていゞ赦さぬ」と。怒りの詞に夕柳御前。「ハア此上は力なし成程重
ねて申まじ。去ながら。今御意遊ばした深い思案。其お心を打明て。お聞せなされて給はラバ。夫を
せめての心ゆかし重ねてお願ひ申さし」と。聞も終らず「ヤア小ざかしき一言譬子細を
聞ば迚何と判断なすへきぞ。ヤアく勘解由。先達て申渡す通り。草を分て三浦を尋ね
捨丸が首討せよ。用捨せば何れも同罪。其旨急度申渡せ」と御座を立て

（41ウ）

入給ふ。なま中の事いひ出し始めの思ひに又百倍詮方もなく見へけるが。夕柳御前
も座を立上り。「よし御立腹有ばあれ。此上は自が命にかへても此願ひ。叶ん物」と御仰に続て奥へ
居ならびし。御つきぐも手持なく皆々随ひ入にけり。跡に勘解由が退屈の。
折から白洲へいつきせき出来る旅合羽。笠を片手にかつ蹲ひ「名古や表の御用調へ。和久
平只今帰国致す。此通り大将へ御披露頼み奉る」と。呼はる声に桜井求馬。襖押明
一間を立出。「ホヽ和久平帰国致せしか。名古や表の普請の様子。しさい委しく申上よ」と詞に勘解
由がのさばり声。「ムヽわりや新参の不仲間。和久平とやらいふやつな。中々左様でご

（42オ）

はります。新参者でござれ共御目がねに叶ひしやら。此度肥前の名古やにおいて
御大将の仮御殿。御普請延引致すに付。拙者めに彼地へ罷下り一日も早く。御
普請成就致す様にとの御上意。夫故早速名古やへ下り。御用向相調へ只今帰国
致したのでごはります。ムヽ此御普請は。某に仰付られ。夫故家来数多を名古やへ遣はし。夜を日に
ついでせり立れど。仮家と云ても大将の居間。念に念を入さすれば。思はず日数もくれる物。夫を待
兼又も儕を吟味役。何と身共が普請の仕方。微塵も油断は有まいかや。ハイ微塵の油断は
なけれ共。引くるめて皆油断。だまれこいつ。此勘解由が申渡した普請の手づかひ。油断

（42ウ）

とは何が油断。イヤモ何のかのと言合ふてからが。一つも役に立ぬ事。高は小一年もかゝつてご
ざる普請が。またろくくに木拵へさへできてござらぬ。そこで私めが。着と其侭棟

梁共を残ず呼付まして。此御普請過急になんば。一日も早く出来致す様。何日
限に建揃ふといふ。入札を申付ましたれば。大がい五七十日から百日迄の日限。其中に廿日
を限り。普請残らず成就致させんと有入札。夫故早速その棟梁に。木材木
の積から。人数の配り様迄を尋ましたれば。割普請をもつての工夫中く利かたに相
叶ひますれば。早速其者に相渡。廿日の日限に増日十日を加へまして。都合三十
（43 オ）
日には御殿残らず成就仕る手筈。其外万事滞ない様に。夫々の役人に急度申渡。名古
屋表を罷立ましたは先月廿四日。今日で廿一日に相成ますれば。最早御殿は成就致してご
はります。何時でも御勝手次第。御出陣然るべう存じまするでごはります」と。委細を聞
て桜井求馬。「ヲヽ遠路の所といひ。殊にご普請成就とはそちが手柄。此通り申上
なば嘸御悦喜。暫く夫に扣へよ」と求馬は。御前へ立て行。跡に勘解由がふくれ頬。「ヤア下
郎め。某が役目をもどき。割普請とやら割扶持とやら。ざまに似合ふた才覚で。
三十日の内に出来とは合点行ず。今にでも出船有ば。狼狽廻るほへ頬を見る様な」と。
（43 ウ）
悪口雑言耳にもかけず。「ハテお前には入ざるお世話。万一滞でも有て不調法に
成時は。奴めがとん腹切ぶん。人の世話には成ませぬ。ヤヽ何と云何じや腹を切コリヤヤイ。
腹切といふはな。今日知行頂戴する侍分の事じやはやい。二合半のもつそふ野郎。不仲間
のざまをひろいで。人がいへば云事かと。腹切抔とは勿躰ない。くたばつたくばな縄切を首
に纏ふて。びりくくが。うぬめらが身分相応」と。あく迄に嘲弄せられ。無念と思へど雉子
と鷹。一言返す詞もなく拳を握る折からに。求馬は又も奥より立出。「コレく和久平。只今の
様子我君の御聞遊ばし。殊の外の御機嫌にて当座の御褒美として御墨付を下
（44 オ）
さるゝ。有難く頂戴せられよ」と押開き。仲間和久平へ下し状の其趣。「此旅肥前の国
名古や表。仮御殿普請の手つがひ万事早速相調へ。仮屋成就致させ候段遖
の働。是によつて只今より武士に取上。知行千五百石宛行ふ者也」と。読も終らず「ナニ。拙者め
に千五百石の御知行を下され侍に御取上。ハアヽ有がたしく」と。御墨付を押戴く。「申勘解
由様御らふじたか。千五百石のお墨付最早侍なれば。夫へ罷通ります」と。お墨付をひけらしく
勘解由が傍に押直り。「何と千五百石頂戴仕れば。是で侍の数に入ませふかな。いか様千五百
石も取は。マア侍分と言物でも有ふか。併侍になれば物事万事が六十敷。マア第一が行義
（44 ウ）
作法。其上武芸鍛錬して。すは合戦に及ぶときは人の首を取ねばならぬが。わりや
人切すべしつておるか。何としてく。軍が有たら一番に。尾を振て逃そふな犬侍」と。いふに和久平
ぐつとせき立。「ヤアいはして置は余りの過言。一合取てもお直扶持人。人切すべを知たかしら
ぬか。試にいざお相人サアく勝負」と詰寄どちつ共騒がすせゝら笑ひ。「ハヽム、すりやわれが
武芸の試に。某に相手になれとか。アノ漸とたつた今取上られた俄侍。まだ刀のさし
様さへしらぬ分際で。コリヤ此勘解由はな。十五万石の大名。其つゝ穂程米貰ふ
迚。大名を相人に勝負とは身の程しらぬ緩怠者。そこ立下れ」と立上り。立蹴
（45 オ）
に蹴上る足首掴「へヽ千五百石戴けば。勘解由様の此足で。踏といふ御意でもごさつたかな。
コリヤお大名に似合ませぬ。近頃卑劣に存る」と。掴んだ足首力に任せ握り拉がん其所へ。御諚

意也」と声かけて。曽呂利が中を押隔て。我君の仰には。仲間和久平義。中々器量有者なれば。千五百石の知行は不足なるべし。去によつて。千五百石に百倍増。十五万石の大名にお執立。今より大谷一学と改名し忠臣を励むべし。則装束相改め。只今目見へ致すべし」と。詞の下よりお小姓衆手々に。素襖長袴得帽子大小小袖迄。目通に差置ば。思ひがけなき和久平が。気味悪い程有難く只ハァ、はつとひれ伏は。曽呂利を始めお小姓衆。「サァく装束く」と。銘々着する衣紋付。

（45ウ）

素襖烏帽子も手取早く着すれば着こなす和久平が。悪びれもせぬ立派の有さま。傍にましくし勘解由がふくれ。こなたはおめず詞攻め。我君のおめがねにより。和久平義。大谷一学と申ます。得とお見知り下さりませふ。アヽ成程見知ませふ。勘解由殿。一学殿。以後は互に。別懇に仕られ」と。いへとむしやくしや岸田が無念。イサ御目見へと曽呂利が案内。しづく歩む大谷一学。やり過して抜討に。切込刀の腕首掴「イヤ勘解由殿。最前は何とやらおつしやつたの。侍になれば人の首を取ねばならぬとやら何として此御手練では。人の首よりお手前の首か飛。軍が有ば一番に。尾を振て逃さふな犬侍。今少手練なされずは。成ますまい」と言様

（46オ）

庭へ真捌「ヤサ曽呂利殿御案内」と。袖かき合す大丈夫。勘解由は庭にちんがく。喰違ふたる下郎が手並。二合半から大名とは早い出世の奴らさ拘らるゝも拘るも。心は深き奥御殿伴ひ。てこそ。【三重】入にけり。播磨路に名も高砂の。片辺り。作徳の徳次迎夫婦世帯を友白髪。田地少く下作に任せて今は楽の身も。独娘が大病に。心いためる二親が。加減の薬日■筒に。あふぐ。炭火の尉と姥いとゞ白髪や勝りけん。こなたに何のくはんぜなき子供二人が寄こぞり人形廻しの手遊びも果はせり合擲き合。やんちやわやくをせいする徳次。「コリャ巳之助よ。又せり合おる。あのお子のおつしやる様に。なぜ

（46ウ）

して居ぬぞ」と呵られてわんばく者。「夫でもおれが人形おこせと。無理計云しやる物。ナアヽおこせといつしやるならなぜ上ませぬ。せり合おると聞ぬぞ」と呵る徳次をとゞめる女房。「コレ親父殿。なぜ其様に孫計を呵られしやる。捨丸様じや迎。巳之助じや迎。まだぐはんぜなしの子供同士。其様に可愛そふにいはぬがよござる。イヤサそふじやないて。委細の訳は此方らもしらねど。アノこちの婿殿は。三浦常陸之助といふて。真柴大領久吉様の。奥家老で有たげな。其自分久吉様のお妾が懐胎さしやつたを聟殿が預つて心安ふ安産しやりました所がアレあの捨丸様。時にどふした了簡やら。久吉様が男の子なら。切殺してしまへと厳しい言付。夫を苦

（47オ）

にして。母御様は死しやる。そこでこちの娘女夫が。何ぼ主人の言付でも。科もない水子は殺されぬとあの子を連て都を欠落。方々に影隠しても。弥詮義が厳しいによつて。娘が縁を幸に。こちの内へござつたじやないか。夫程聟殿が大事にかけさつしやる。アレあのお子。ひよつと留主の間に。怪我でも有ては言訳かいじやらぬサア夫はわしも知て居れど。余り孫計を呵られしやるによつての事」と。祖父祖母せり合其中へ。物もふ。卜庵お見舞申ますと。丁稚が案内にそりやこそお医者と傍辺り。取片付る。おうへにによつこり。コレハくト庵様。御苦労でござります。イヤく苦労と存て大切な病人は預られぬ。シテ様子はどふでゑすの。ハイ。

（47ウ）

さして替りました事もござりませぬ。ムヽかはつた事もないか。イヤモ替つた事のないがよいでゑす。替つた事に余り能事はない物でゑす。マア追取てかはつた事は。真柴大領様の朝

鮮責。何と日本から唐責るは。替つた事じやないか。其お船が明石の浦へ着て。けふで十日余
の日和待夫で近郷近在が。辻番じやの火の用心じやのと。上を下へもてかへしまする。定て爰も
そふでござらふ。ハイ左様でござります。其事て毎日く。代官所へ呼付。けふこちの聟殿も。代官
所へ呼出されましたが。何の言付か存じませぬ。イヤモ知た事いの。喧嘩口論火の用心に気を付い
でござらふ。トレく病人を見舞ましよと。祖父祖母伴ひ奥へ行。跡に丁稚の猪呂松が子供の中へ
（48オ）
打交り。ホヽよい人形が有な。コリヤ大将。時政の人形じやなと。ひねくり廻しておかけにかはりかゝ
つた声はり上。大将時政采配ふり立。チヽテンツヤアく弁慶。爰くと云ければ。何じやくと傍へよりテ
ンツテンく。われも。兵。おれも兵。テンツテンいざござれ。喧嘩せふでは有まいか。カウイカツタイ。口三
味線やら口かげやら。取所なきあほうの遊び。見て余念なき子供より。猪呂松一人が面白がり。持遊
び箱
を引くり返し。山の大将おれ也と。大声上て呼はりしはすさましかりける次第也。間の襖も。しめや
かにト庵伴ひ二人は立出。「何と様子はどふでござりますな。イヤけふの脈躰は大分よござる。ハイ夫
は嬉しうござります。したが爰が大事じやぞや。アノ病は兎角物を苦にするが病症じや程
（48ウ）
にの。随分何にも聞さぬ様に。扱ひが大事でゐす。兎角労性といふ物は六十敷。其上
に疝気が出伝ふた物でゐすて。ヤア申アノ。女子に疝気が有物でござりますかへ。有
共く有段か。マアじたい疝気といふは。女性の事でゐすはいの。アノしかも若い女性の事。其
若い血気に任せ。無上やたらにする気ならよけれ共。恥しがつたり遠慮して。したい事をじつと
答へて。せんきになる故。此病を生ずるでゐすは。何と理屈でゐすか。爰らを医慰する
が。おそらく学力でなけりやいかぬ事と。自慢たらぐ。調合しまい又明日見舞ませふ。アイ猪呂
松め。何しておると。いふもうつかり馬の耳。風も吹ぬに柳の木が。ソリさこそ動くは妖物か。エヽあ
（49オ）
ほうめと天窓をこつつり。アイタヽ只逝よりは此人形。一つちよろ松がちよろまかし。テンツテンく医
者の供してステンツチン立かへる。引違ふて常陸之助。跡に大勢矢襖作り。取巻趣意は白須賀軍
太。問近く立とゞまり。ヤア常陸之助願ひの通り暮六迄は猶予してくれん。夫迄に捨丸君。
御首取て持参するか。ハアヽ斯露顕の上は力及ばすいたはしながら。捨丸君御首給はり。実
検に入申さんホヽ神妙く。其義ならば暫らく猶予。ヤア家来共。此場を赦し。此家の四方を
取巻と。事厳重に手配し。元来し道へ立帰れば常陸之助は跡見送り。思案極めて。我家の
内。這ど何にも知ぬ祖父。「ヲヽ聟殿戻らしやつたか。定めてけふの言付は。久吉様の船の
（49ウ）
有中。随分火の元大事にせい。辻番立番自身にせいとの事で有ふの。イヤ左様
なさゝいな義でござらぬ。今日拙者を呼付しは。大領の御船。明石の浦に逗留の内。
いかゞしろしめされけん。捨丸君此。高砂の浦に隠し置参らす様子。逐一に相知れ。首
撃て出すか但し。討手を差向ふかと。のつ引ならぬ手詰の詮義。陳するに詞なく。
今日。暮六つの鐘を限。首討て渡さんと。契約致し罷帰る」と。聞て驚く徳次夫婦。
「そんならこなた。暮六つ迄に。アノ捨君を殺すのか。イヤ何しに捨君害し申さん。尤主君の厳
命とは申ながら。討奉る程なれば。三年四年の御養育。遙々と此所迄。狼狽逊ては参りま
（50オ）
せぬ。ムヽ夫なら又。暮六つ迄に討ふといふて受合たは。サアそりや躬巳之助が首。ヤアくくそんな

ら孫をお身がはりに。アノ巳之助を殺すのかいの」と。祖父祖母倶に恟り仰天。「アヽ申御両所
声が高い。若病人の耳へ入ては事の妨。夫じや迚。大事のく。孫を。ハテ。まさかの時は躬
が首と。思ひ込だる兼ての覚悟。武士の上には願ふてもない主君の
身がはり。家来大勢近辺を徘徊すれば。若捨君を見付られては詮ない事。某は
しるべの方へ捨丸君を御供申。深く忍はせ立帰らん。それ迄必女房へは御
沙汰なしに頼み入」と。捨君を抱参らせいづく。共なくかけり行。跡に夫婦は。

（50 ウ）

うつとりと。大事の孫が命の瀬戸。聟の詞の一徹を案じ入たる額と額。傾く笠
も梵論の修行者。門口に蔀立る。鶴の巣籠夜の鶴。子よりも可愛孫が
身を。案じる祖父が螯声。「通らしやれく。面白そふに是が尺八所か。通らしやれ通
らしやれ」と。押返したる詞に修行者。何思ひけん打黙頭。御免といふも口の内しづく。奥へ行ぞ
とも。白髪の祖父が「コレおばヽ。何ぼ聟殿が忠義じやと云しやつても。あれ程迄育た孫を可
愛そふに。どふむざく切るゝ物でとこちらは思へど。そこは又侍了簡。是非孫を殺す心
で有が。そふ成た時はのふマアどふしたらよからふ。そなた何ぞよい分別ないか。ヲヽヲあの言しやる

（51 オ）

事はいの。こなたさへない分別が何のわしに有物で。ハテないと言て是がマア済物か。日暮迚最
間はない。聟殿が戻られぬ中。どふぞ仕様はない事か分別仕や」と。老の心もいらくらの中へ又
もや修行の薦僧。音色詛しき笛竹も。思ひ有身は耳やかましく。「エヽさつきにから通ら
しやれといふにどびつこい薦僧。手の隙がない通らしやれ通らしやれ」と。見向もせねば
修行者は。是も同しく。奥へ入。「コレ親父殿よい分別が出ましたはいの。ヲヽよい分別とはそりや
どふじやく。サレバイ。わしが思ふには。アノ巳之助に年格好も。同じ様な捨丸様。孫がかはりに。
あの子を殺してはどふ有ふの。エヽこなわろはマとでもない。其捨丸様が殺されぬ大事のお主じやに

（51 ウ）

よつて。孫を殺そと云のじやはいの。ホンニそふじやの。こりや分別が六ヶ敷」と。又も案じる又吹
来る笛の音色も修行者も。替れど知ず独と心得。「エヽさつきにから通らしやれ言ふ声
へぬかいの。ハアヽ扨は聾じやの。聾なりや聞へぬが尤。よしく。そんなら又仕様が有」と硯引出し
大文字に。薦僧殿通らしやれとべつたり書て出。門の柱にこてく張付又。元の座に
居すはれば表の方には段々に出来る薦僧門口の書付見ては打黙頭皆々奥へ打
通れど。只うつかりと心も付ず案じ入たるおぢうばが。分別袋を捜しても下戸と妖もの
よい分別もない物なり。憂事の数は七重か八重衣が。身に重りし病ふの床。おもき

（52 オ）

枕を漸上。いふ息さへもよはくしく。「とゝ様かゝ様。巳之助はどこに居やる。ちよつと逢たい呼で
く。ヲヽくそこへやりましよ巳之助く。どこに居るぞいの。さかゝ様が呼でじや早ふ往やく」と来呼れ
てアイとおとなしく。奥の襖をそつと明。枕元に跪く。我子の顔をつれくと。打守りく。
苦しき。其身を起直り。「コレ巳之助さつきに夫。常陸之助様もおつしやつた事を。わしや
よふ爰で聞て居たが。若とゝ様が捨丸様のかはりに。わがみを殺そとおしやるなら。ちやつと
此母が傍へ迚て来てたもや。イヤわしや侍の子じやによつて迚る事はいやじや。お主
様の為なら尋常に死と爺様が言てじやに寄てわしや尋常に殺される。其だいに死で

（52 ウ）

もやつぱり。かゝ様の傍に置て下さんせヘヲヽぐはんぜもない。かはいらしい。悲しい事を云子じや

のふ。尋常に殺さりやつて跡に残つた祖父様祖母様此母は。どの様に悲しかろ。何とあられふ物ぞいのふ。去ながら。遉とゝ様の子程有潔い事よふいやつた。夫が侍の道じや。道は道じやけれど。わしやどふ思ひ諦ても。何とそなたが殺されふぞ。常々夫のおつしやるには。まさかの時は捨丸様のお身がはりにせにやならぬ。其時必。未練な気を持なとの言付。私も武士の女房じや物。何の未練がござんせふと。其座では云たれど。一日く成人仕やるに随ふて。おとなしい事又わやくな事。見るに付聞につけ。とふぞ久吉様のお心も和らぎ。

（53 オ）

捨丸様も恙なふお命助り給ふ様と。神様や仏様へ朝夕お願ひ申たも。元はそなたが可愛さ故。其甲斐もなふけふの日に。つゞまつて来たコレわがみの命。忠義故とはいひながら。是が何と殺されふ。忠義も手柄も孫子の為じやないかいのふ。たつた一人のかけがへもない子を殺さふとはそりや。余りどうよくな。気づよいわいの常陸様。それ程忠義が立たくばわしから先へ殺してたべ。生有内は何ぼでも此子は殺さぬく」と我子を引寄抱しめ其侭そこにどふど伏。前後正躰。泣叫ぶ始終こなたに親々が。答へて見ても答へかね「ヲヽ娘道理じやく

（53 ウ）

尤じや。是に上越尤が世界中に有物か」と祖父祖母倶においく泣こぼす涙は隔れど落る所は子故にて瀬も渕となる計なり。かゝる哀れもしらま弓矢猛心を張つめし。常陸之助は捨君をしるべに忍ばせ。とつかはと立帰る気も夕陽「申親父様く。最早暮るに間はない。検使のこぬ中躰を早ふ。くく」と覚悟の刀。寝刃合せば親父はうろく。遉に母は巳之助を隠さん物と一間に入。見れば娘が抱しめ。伏たる孫に手をかけて。抱とらんとあせれ共。放さぬ手足も氷のごとく。「ヤアこれくこりや娘は死だはいのノウ悲しや」と泣声に夫も親も恟り仰天。

（54 オ）

同じく一間にかけ入て。「コリヤ娘やい。女房共。八重衣やい」と呼ど。答へも亡骸に。抱かれて居る稚子が。「かゝ様死で下さんな」と。ねながら歎けば夫婦は声上。「娘のふ娘やい。コレお祖母たつた今迄物云たに。こりやマアどふじや。どふ成事夢見た様な別れや」と悔。嘆けば常陸も倶に。不便と思へばつゝかくる。涙を瞼に押包。「御歎は断ながらいふて返らぬ死出の道。此侭臨終渠借（かれが）幸。まだ此上にも躰が最期。必歎給ふな」と。立寄て巳之助を抱取んと引上ても。放さぬ我子にかけし手を。力に任せ押わけても。ちつ共ゆるまぬ死骸の両手。こはくいかにと飽る常陸。徳次も

（54 ウ）

不思議立寄て。「ヲヽこりや孫を抱た娘が手がねつから放れぬく。コリヤどふじや不思議く」に三人か顔見合せ飽れて。詞なかりけり。母は正躰声を上。「さつきに戻つて聟殿が。捨丸様の身がはりに孫を殺そと云てゞ有た。其様子を襖こしによふしつて。こな様の留主の間に其子を呼で何や角や。悲しい事をいひならべ。何ぼとゝ様が殺さふといふてゞも。わしが殺さぬくと。泣つくどいつしやつたが。其なりけりに死やつたかいの。コレくそふいふ事なら其時にどふぞ仕様も有ふもの。死る今はの際迄も可愛くに凝かたまり。抱しめた其手じや物。何の放れふ可愛や」と歎くを聞て常陸も

（55 オ）

恟り。「ムヽすりやお身かはりの様子を聞。夫を苦にして取詰たか。ハヽ子は夫程迄。可愛物か

女房」と。忠義に尖き刃がねも蕩とふど座せば徳次もがつくり腰ぬかし。「おりやモ
悲しうて身も世も有れぬ。お祖母。ヲヽ親仁殿。なぜにこちは長生して。こんな憂目は
見る事ぞ」と娘の死骸に取付て前後涙に暮六つの鐘かうくと響きけれ。
常陸之助涙を払ひ。「女房がせつぎといひ。御両親の御歎き到つて重しと
申せ共。忠義にひすれば塵芥よりも猶軽し。アレ早約束の刻限なれば。猶
予はならず其躰。よし放さずな放さぬ迄。此侭首を」と抜放し既に斯よと見へ

（55ウ）

ければ。ヤレ早まるな常陸之助。暫く待」と呼はつて一間をひらき真柴久吉。其外守
護の諸大名。柴田勝家丹羽長秀薦僧姿其侭に。異義とうくと居並べば。
コハいつの間に御入来と。驚ながら常陸之助座を立下り平伏す。大領しづく立出
給ひ。「ホヽ珍しや常陸之助。汝我詞を背き捨丸を共奉し。此所に隠れ住事。此度
朝鮮征伐に付。明石の浦に逗留の中注進有て知たる故。早速此家へ来りし」と。
仰に常陸頭を下。「御諚のごとく仰を背く某。此所に隠れ住は全く命惜に有ず。天下にかけ
がへもなき御世継の幼君事もなきに首討とのご諚意讒者の為にまどはされ。御

（56オ）

仁心を失ひ給ふか。臣として君の非を攻めすんば有へからずと。度々の諫言申といへ
共。御用ひなければ是非に及ばす一先幼君を隠し参らせ。又もや諫を奉らんと。
此所へ身退きし某。御威光をもつて顕はるゝ上からは。理非の論にかゝはらず。御諚
意を背く大罪。御征伐はお心任せ。聊恨奉らず」と義に。進んだる常陸が一言実
忠臣の鑑なり。「ホヽ逋成申条。其方が詞のごとく。四海一統切治る此久吉。世継
に立べき躰とは天にも地にも捨丸一人。其一人を害せよといひ付し我所
存情なしとも無法共恨は尤至極。捨丸誕生の砌迄は。主君信長の御孫君

（56ウ）

信雄卿。未御在世ましませば。何卒此君を守立。四海の主にそなへんと。忠義
一図に思ふに付。我に男子有時は久吉こそ我子に迷ひ。信雄卿をそで
になすと思はぬ事も世の人口。人の謗にあふ時は。是迄尽す忠義はむだ事。
所詮子なきに過べからず。出生の子を害し我子に迷はぬ忠義を顕はし。心よふ
信雄卿を守護奉らん其為に。扨こそ捨丸害せよと。汝に申付しぞや斯迄
心を砕といへども天命拙く信雄卿。御病身にて身まかり給へば。我忠臣も徒に。何
ぼうほいなく。思ひしぞや。其後は取立へき主君もなく。自然と我手に治る四海。此上は我

（57オ）

躰害するには及ばね共。一旦某がいひし詞。背く汝も忠義とは云ながら。我一言は
下万氏の掟となる。其詞を反古になしては。四海の掟は皆くら闇。去によつて汝が
行衛を厳しく尋。躰迚も用捨なく。捨丸が首討て。我一言を立ん為。姿をかへて
入込しに。最前より一間にて。八重衣が最期の様子。見るに付聞に付。子を思ふ親心。誰も。
斯こそ有べけれ我詞を立ん迚。捨丸を殺しなば。巳之助迚も生て置まじ汝が所存。
左有はいらざる無成敗。我詞は反古となす共忠臣には又かへがたし。八重衣がせつ義と
いひ。汝が誠にめんじ捨丸が命を助。今より世継に立べし」と死骸の傍へ立寄

（57ウ）

給ひ。「捨丸を助る上は。巳之助が命に別条なし。迷ひを晴し成仏せよ八重衣。なむ

あみだ仏」と。合掌の詞は重き司会の主。御吊ひに恩愛の迷ひも晴て離るゝ
稚児。「ヤア是々娘が手を放したはいの」とおぢうば奇意の思ひにて。是も偏に大将の
有難い御詞。いか成知識長老の回向に勝る娘が成仏。「ハア、有難や尊や」と悦ぶ
も又涙也。常陸之助猶もひれ伏「物数ならぬ某が忠義を思しやり給ひ。有
難き御仁心。此上は片時も早く。捨丸君の御供せん」と。座を立上れば表より。「捨丸君の
御在所尋ね加藤正清供奉致す」と幼君抱出来れば。「ヤア人知ぬ茅屋に深

（58オ）

隠せし其公達。貴殿はいかゞ有所をしりし。ホヽ一天四海を一目に見下す主君大
領。横目を蒙る某。大将の御在所を供し最前此家へ入来れど。捨君見へさ
せ給はぬ故。忍び出て御在所を。尋ね出したに何に不審。イザ父君へ御対
面遊ばせ」と。詞に大領御悦喜有。「大将たる身の望は忠臣。父が器量を
請つぐ巳之助。只今より捨丸が。家来となして養育せん」と。仰にハツト常陸
之助我子をそばに引寄て。「コリヤ母の恩義は取に足ず。眼前命助るは君の仁
心。子心にもよく覚へ。捨丸君に忠義をはげみ。若御大事に及びなば

（58ウ）

コリヤ。お馬先で討死し。家名を古今に残せよ」と。父が庭訓受次稚児「ヲヽ
軍が有たら敵の大将をコレ。此様に首取」と物遊び人形の大将時政首。ふつつ
と引抜て勇悦ぶ巳之助は実捨丸の御内にて。四天王の其一人。摂州善
江で討死せし三浦長門と呼れしは。此稚児の生立也。人々悦ぶ其中に時刻移
れば正清が。「イザ御出船候へ」と諌め申せば常陸之助。暫くそふといふ間もなく。髻ふつ
つと押切て。「一旦御不興受たる某。此侭にて御奉公は心よからず第一憚り。今よりは武士をやめ
お傍さらずに御茶の給仕千の利休」と姿も心も一くせ有。流義は世上に

（59オ）

弘まつてもてはやしたる茶道の達人徳治夫婦も涙を払ひ聟殿
の相伴して。娘が菩提お茶湯の給仕と。仰に白髪を押きりく投
出たる初発心。利休は捨君巳之助を倶に。都へ帰国の旅。異国退治
の大将に。付添勇士は鬼上官。柴田勝家丹羽長秀直に是より
船路の旅娘は冥途の浮旅と。なくく死骸を抱上。若木の
花を先立て残る。老木は尾上の松の。枝に杖突尉と姥名は高砂
の。浦おもて。相生ならぬ愛別離苦悟れば。心明石潟別れく出て行

（59ウ）

第四

隔れば名も知ぬ火の筑紫がた。呼子の里に知られたる名古屋山三が憂住居。
妻は渡世に名を取しお国歌舞妓の太夫本。此度朝鮮征伐迚久吉此地に
ましませば。御慰に御上覧と召出さるゝは大慶と。道具立から小道具廻り。美を
尽したる拵へ也。此村の庄屋頓兵衛。袴ため付門口から。「山三そこにか。ヤレく嬉しや
く。手摺道具人形の長持。夫くに改めお役人様へ残らず船へ積仕まふた。
是からは御前へ上る人数改め。太夫三味線人形つかひ。残らず改めのお役人が。追付

（60オ）

爰へ見へる筈。其用意もして置や」と。聞て山三が「是はくいかい御苦労。私も手

伝に参りませふと存ておりましたれど御存の通り。道具の分は先へつかはし。
残りの太夫操り方も。日の中にお屋敷へ入込。暮早々から始めます。仰付でご
ざんば。其手つがひ何角に取込。夫故お前に船積の道具。万事をお任せ申。
お世話を頼ました所。首尾よふ御仕廻下され忝ふ存ます。おくに頓兵衛様が戻
つてじやぞや。お茶上ましや」といふ声に。アイと諾へて立出る。お国歌舞妓と名に
うてし。賑手風流も器量からお茶お一つと傍に寄「コレ頓兵衛様。此間から

（60ウ）

何角のお世話。忝ふ存ます。お前もお知なさるゝ通り。私はお国歌舞妓と申
て。かぶき芝居が商売なれど。此度の御上覧は操との御所望故。俄に手
摺道具立。人形の拵へ衣装の仕立。新に致す事なれば。どふ有ふぞとおもひ
の外。滞なふ出来揃ひしも。お前方の御世話故。忝ふ存ます」と。いふに頓兵衛
打黙頭。「オわがみ達が芝居するに。村のたばねもする庄やが。袴着て飛歩行
筈はなけれど。御上覧といふが大ていや大方重い事じやない。夫故吟味のお役人が。
立かはり入かはり村中引くり返る。こちとらが袴着て。飛歩行もお上への御奉公とは云ながら。

（61オ）

畢竟吾儕達から発つた事じや。夫じやによつて此かはりには。物事何角首
尾よふ済で。芝居代を下されたら。此庄屋と半分配。其時いぢむぢいふまい
ぞ」と。村のたばねの威光より。欲に天窓ぞ光りける。折から表へ押柄らしく。のさくと
入来る侍。「ソリヤお役人の御出」と。庄屋は天窓を畳に付敬へば。上座に通り。「身共事は。
苔田沖右衛門といふ者。此度御上覧の御前操。早速何か相調ひし由神妙く。夫
につき今晩御前へ罷出る役人。残らず書付を以て扣へ置と有。御家老中よりの仰付。
去によつて苔田沖右衛門。是迄推参仕つた。其芸者共を一々是へ呼出せ」と。事仰

（61ウ）

山に云渡せば。お国ははつと手をつかへ。「コレハまあく。お役目とは申ながら御苦労によふこそ
お出。まだ揃ふておりませねど。マア奥に居られます計。お目見へを致させませふ。
サア皆のお衆。お役人様がお呼なさるゝ。サアく爰へ」と呼出され。はつと諾て納戸より。
太夫三味線操仕女まじくら。立出れば。山三は傍へしやくり出。「サアく是から座付引
合せ。独々名を申ます程に。お書付なされませ。マア是に居られますが。此度御
前操の座本。名古やお国と申ます。弥御贔屓を頼上ます。ムヽ座本お国。よし
く。扨其次が浄瑠璃太夫。豊竹富士の山太夫と申ます。何じや富士の山太夫。

（62オ）

ハテ仰山にゑらく長い名じやな。われ太平楽ではないかよ。イヤ其筈でございます。
先第一此太夫殿の声は。何じやかしらぬが。めつた無上に高ふ大きうて。三国一に鳴渡る
といふ心で。富士の山太夫。ムヽよしく。サテ其次は何といふ。ハイ。其次なは三味線。鶴沢三
四郎。ムヽ何じや。三四郎。是もよいは。扨是からが操仕。女芸者でござります。ム何操
仕とは。エヽでこつかひの事か。ハイ左様でござります。マア先に居られますが。呉竹お梅と
申ます。其次がなよ竹お嶋でござります。扨其次がいや竹おへたと申まして。異名
を三荘太夫と申ます。ムヽ何。異名を三荘太夫とは。ハテつかひ殺すといふ事でござります。

（62ウ）

ムすりやゑらい上手だな。アイ。上手の段じやないぞへ。私が人形を持と。マア第一たてり

から違ふはいな。そふしてあら事ごされ。所作事ごされ。色事は猶得物。イヤ其頬で色
事は赦せだ。ヲヽあのさんとした事が。顔に寄た物かいな。こちや心いきでするはいな。エ其
心いき猶いやだ。コリヤ此者共計で。残らず済かよ。イヤまだ外にごされ共。爰に居られま
すは此衆計。跡役者は参り次第。お引合せ申ませふ。扨其跡は私を。お印なされて下
さりませ。ムヽわりや何役。名は何といふ。ハイ私の役かな。ヲヽわが役は。大かた浄るり太夫
で有ふ。そふかく。イエく。此声で浄るり語つたら。世界中の糠味噌が損ねます。

（63 オ）

ムヽ然らば三味線引か。けもない事。ムヽ太夫てなし。三味線弾でなくば。エヽ差づめ
でこ遣ひか。イヤ。銭金なら相応につかひますれど。人形つかふ事中く思ひも寄
ぬ事。ムヽでこつかひでもなくば。われが役は何をする。ハアヽ何役じや有ふぞ。ヲツト能
役が有ぞ。私は作者でござります。ムヽ作者とは。そりや何役。アノ作者を。御存ではご
ざりませぬか。作者と申は先狂言の趣向。扨操の趣向。何に寄ず案じ出して作
ます故夫で作者。ムヽ其作者といふそちが名は。ハイ。名は山三。シテ苗字は。アノ。苗
字かな。ハアヽ何とやら。おつと思ひ出した。苗字は浪木。名は山三でござります。ムヽ浪木

（63 オ）

山三といふ作者はわが事か。私でござります。作者の證拠は。智恵がふつぷと吹出て
ござります。然らば今夜の操も。定てかはつた趣向拵へたで有ふな。拵へた段か。誰
有ふ四海の大将秀吉様の上覧と有故。何がと存しまして。案じ出しました趣向。マアちつ
とかいつまんで咄して聞しませふかい。エマア大序が。源の頼光。大江山のすつてん童子を
退治の所。扨其すつてん童子が。段々と零落まして。蜆川で天満やのお初と
いふ。女郎に成ますじやて。サニすつてん童子が。お初といふお山に成か。そりや又
どふして。お山になるか。サアそこが趣向でござります。彼すつてん童子が術をもつて。お山

（64 オ）

に成ておりますと。其お初に平野屋の徳兵衛が。しつぽりとした濡事の所が。第
二段目。彼お初が色の徳兵衛といふは。誠は武蔵坊弁慶。すつてん童子を。見出さん
が為の計略。何とゑらい趣向でござりませふがな。ムヽイヤモゑらいく。ゑらふゑい。扨三段
目はどうかく。扨三段目は愁の段でござります。先熊坂の長範といふ盗人が。丁稚
の長吉を殺し。金を取所へ。長吉が姉。安寿の姫が。戻りましての大愁。是から四段め
が大道具。宇治の常悦が。謀叛顕はれたといふ事を。運気をもつて悟り。主人の娘
照天の姫に。落さつしやれくと。いふと段々道具をば。せり上て参りますが。其場の趣向。何

（64 ウ）

とどふでござります。ムヽイヤモとふだか。ねつから合点が行ぬ。こりやマア何といふ外題じや。
ハア外題かな。ハアげだいは出ほうだいお尋咄し。イヤこいつ人を馬鹿にひろぐな。儕出ほうだい
お尋咄しといふげだいが有てたまる物か。身ふしやうなれども苔田沖右衛門。馬鹿に成
ては武士が立ぬ。コリヤ見い。抜た刀は葵下坂二つ胴に引腕だ。夫出おらふ。エ。出おらふ。エ。出
おらぬかく」と。きつぱ廻せばお国がとゞめ。「段々の不調法お腹立は皆お道理。併大事の
御上覧の折ならば。何事も私におくれなされ。御了簡遊はして。奥へござつて酒一つ」と。
上手こかしに面を和らげ。「いか様そちがいふ通り。太切の折なれば今は赦す。以来を急

（65 オ）

度嗜おらふ。コリヤく庄屋。身共は暫らく奥へ往て。残りの人数揃ふを相待。

汝は其者共を迎ひの船迄同道致せ」と。言付られて庄や頓兵衛。「然らば
左様に致しませふ。お国山三は残りのわろ達。揃ひ次第跡からおじや」と。太夫
三味線操方。皆伴ふて出行ば。苔田も立て。奥へ行。跡に山三が小声
になり。「コレお国。ぬつ〻りこつ〻り云廻し。そふやら斯やら御前へ出る。人数の内に
は加はつたが。兼々そなたに云合した通り。首尾よふ仕遂る用意はいか様に」と。
いふにお国も差寄て。「夫は気づかひ遊はすな。秀吉に近寄ば。兼ての本望達せ

（65ウ）

んと。肌身放さぬふところ刀。ホヽ出来たく。松永大膳が一子靱負之助。かゝる
姿に身をやつし。年月心を砕きしも。親松永が敵。秀吉を討て恨を晴さん為。時至
つて今月今日。久吉が館へ召出るゝは。武運のひらけ口。随分ぬかるな女
房」と聞てこなたも勇み立。「ヲヽそふでござんす共。長の年月夫婦心をくだ
きしも。久吉討ん為計。譬運つき顕はれて所々の死はなす共。未来は必夫婦
ぞや」といさむ内にも女気の落る所は恋路にて涙。わりなく見へにけり。
いつの間にかは沖右衛門。始終とつくと聞すまし。「ヤア山三といふは松永大膳が躬

（66オ）

とな。久吉公を討んとは不敵のやつばらいで。討とめて手柄にせん。観念ひろげ」と云
間もなく。抜放して切付るを。かいくゞつて腕首つかみ。「ヤア大事を聞た上からは此方から赦
されぬ」と。引かづいて頭顛倒。投付られても沖右衛門「ヤア青二才めが推参」と。又切付
る刀をすかさず引たくり。肩先より乳の下迄。ばらりずんと切さけられ。うんと苔
田が其侭に。もろくも息は絶果たり。「サア敵討の血祭りよし。是から直に迎ひの船。
こいつは冥途へ送り船。サアござんせ」と夕日かげ。浜辺をさしてぞ。【三重】いそぎゆく
真柴大領高冨の久吉公朝鮮征伐有べしと。肥前の国に御在陣御徒

（66ウ）

然の慰みも。多かる中に取わけてお国操御上覧と。金銀珠玉をちりばめし手
摺舞台をかざり立。錦の幕を引はへて。御桟敷に渡御有ば。家中の面々
次第により見物群集袖を連ね。今や遅しと待中に。早始りをしらせの太鼓。
とふからどつと打切ばなりをしづめて。見物の中へによつこり口上人形。東西く。お国操
御見物とござりまして。御歴々様御出の程。座本お国義葉申上るに及ばず。惣座中共
いか計有難ふ存奉りまする。扨。御慰に仕ます御前操の外題。男神功皇后
附たり。異国の鱸は加藤小西がむしり肴と申ますが。操の外題でござります。

（67オ）

はゞかりながらあやつり始りましてもこざりませふなら。御神妙に御一覧の程。
こひねがひ奉ります。先は此所が男神功皇后。初段のはじまり左やうに
御覧くださりませふ。江遠ふして水数流れ。天晴て鳫転とぶ。
故山千里の高麗国。遼東大王と申奉るゆゝしき帝。
おわします。第一の臣下李良耶碩郎耶を召れ。「扨も大日本
の武将王高冨久吉。我国の貢物怠る事を怒。日本の兵船数万
艘。釜山海へ寄ると聞。入立ては叶ふまじ。汝が家来沐海潜は。水練

（67ウ）

を得し大力と聞ば。彼を毒魚の形に作つて海に入。大将の乗たる

船を覆し。寄来る敵を皆殺しになすべし」と。居ながら日本を一呑の高
麗茶碗の我がちに軍の用意ぞ。なしにける。斯て日本の御先手
加藤虎之助小西弥十郎。釜山海に船乗捨城際近く進んだり。時に不思
議や俄に磯うつ波高く。海上さかまき一丈あまりの鱸。剱の鰭を振
上く。二人をめがける有さまは様危ふかりける。三重次第也。小西加藤はちつとも
ひるまず。「ハテ珍らしい魚の形。イテ料理して一こん汲ん。実尤」と両人が大手を

（68 オ）

のべてかいつかみ。磯ばたに引上れば。波はすつぽり高麗人。沐海潜と云
者余すまじ迚切てかゝる。「かいくゞつて引つかみ。生魚の鱸生箸いらずの
手料理」と。両人寄て片足宛ゑい。やつと引さき捨。すぐに此城攻
落さんといさみにいさむ両人は。異国本朝まれものやと。貴賎
上下をおしなめてかんぜぬものこそなかりけれ。「とうざいく此所
は大王きさき。へるあんどうよりちやらすぼろんまでのみちゆき。
すなはち国太夫ふし両人にて相つとめますたゆうに御らふじませふ。」

（68 ウ）

御前あやつり　道行れんぽのちやすげ
国太夫節　日の本も。異国も同鳥の跡。文字にかゝねば詞には。聞わけがたく聞
しらず。御いたはしや大王は。へるあんどうを立いでゝ。あぼすとうげの
夜の道こけつまろびつ。お后の手をとりかはす。うきたび路。きのふ
は雲井の御すま居じりくちくすい。引かへて。うるさんがだけしんくと。
たゞ月ひとりかげうつりくもにさほさす。あま小ふね。れんの
くとひくあみの。めにもたまらぬてれめんす。これからさきの事

（69 オ）

とへバ。こたへもなみのしらはまに。しばらくやすらひ給ひける。みかど
なみたのひまよりも。「ノウきさき。ちんはちやらすぽろんへくだつても
あすをもしらぬうきいのち。そなたはこれよりこしにのりへるあん
どうへ立かへり。おやたちをたのみ身のおさまりを思ふてたも。いとしい
そなたをちんゆへに。なんぎをかけるがかなしい」とうちしほれつゝの給へ
ば。きさきはかほを。ふりあげて。うらめしのお心や。かゝるいぶせき敵の中に
みづから。ひとりおきのふね。こがれくてしねよとはあんまり気つよひどふよく

（69 ウ）

な。アレくく。あれ見給へ孔雀さへめをとくはあるものを。たとへとらふす千
里がたけ。うにかうるすむ。あらいそまではなち給ふなはなれじと
四列。もつれつゆきすぐる。こんたんぢや屋のいろ町にはやり哥
とておもしろく。ちよいきんちんなんこんびきせうトヽフヤアマア。く。きん
にやらうにやらの世の中もさはらがさつとすんで有。トスヤアく。げゝすのぎやアのほうた
らほさいろはやゆくほどにいんのやほるかやはやはやすぎておと
にきこへしかぐなみのちやらすぽろんに。三重つきたまふ

（70 オ）

「夜も更ましたれば。先今晩は是限でござります」と。切口上に貴賎の見物。よいや

操申たと暫らくなりもしづまらず。直に舞台をかた付る手摺手々にお
次迄。運び仕舞て大書院音もひつそと。しづまりけり。程なく大将久吉公御桟
敷の御酒も過。御機嫌よげに手給へは。跡に引添大谷一学。出頭の身ののけぞり
烏帽子。素襖の袖も大広間。御座を設けの脇息に。ゆうくと寄添給ひ。「何
と一学。音に聞たお国操。中々作意出かしおつたな。ハアヽ御意の通り。此度朝鮮御征
伐として。御人数を差向られし。其跡のお慰。異国退治の賀を祝し。男神功皇后

（70ウ）

とは。追付朝鮮御手に入ん先表と。千鶴万亀御目出たふ度い存奉る」と。おも
ねる詞に御機嫌能「ホヽ汝が申通。加藤小西を先手として。朝鮮へ差向ひし者共。
未勝利の沙汰もない中心よい今の操。其お国とやら。目通りへ呼出せ」と。仰にはつ
とお小姓衆お次の間へと呼に立。暫く有て襠の。留木の音も。世に知れし。賑手
風流も上々のお傍へ出るは初舞台ういくしげに御座の間を。遥隔てかしこまる。大将
つくぐ見やり給ひ。「お国といふはそちじやよな。扨見事。マヽア第一器量が能て気に
入つた。我を祝した今の操頓智発明出かしたく。近ふよれく」と。猫撫声もほろ酔機嫌。

（71オ）

お国ははつと両手をつき。「コレハく。わたしら風情の下ざまに上々様の冥加ないお
詞。何とお受を申そふやら。憚りながらお傍からよかろふ様におとりなし。おつしやつて下
さりませ」といふに一学すゝみ出。「イヤモ取成に及ばぬ我君を祝し。男神功皇
后とは頓智の作意。殊に大王が国太夫ふしでの道行。異国詞のちんぷん
かん。殊のふお上の御意に叶ふた。ヶ様な事は皆其方が拵へるか。但しは外に拵
人が有か。ハイござります。都てかような事をつゞります者を作者と申まして
時代事世話事。或は当世の珍らしい事を案じまして。浄るり又は狂言に拵へます

（71ウ）

が其作者の役でござりますれど。私はお国歌舞妓と申まして歌舞妓芝
居をおもに致しますれば。何がなお慰と存まして。俄に拵へました今宵の
操り。則作者浪木山三と申ます」と咄すをつくぐ聞入大将。「ムヽ其作者と
やらも是へ呼べ」と又も御諚にお次より。ハア其作者是に扣ておりますと上
下ため付うづくまる。「ムヽ山三とやらいふ作者はそちよな。我を祝した今宵の操り
出かしたく。褒美は扶持してくれん」と。御機嫌斜何よりも悦ぶ山三が身
の大慶。「ヶ様な事が御意に入。夫で御扶持を戴くはほんの濡手であはの守。大

（72オ）

名の作者我なるは」と感ぜぬ者こそなかりけり。「ハヽヽヽ。中々気がる頓作者渠
らを相手に一献酌ふ銚子く。アレお銚子と御意遊ばす。早ふく」とお国が気転。「ヲツト
心得湯婆しやない。爰に幸長柄の銚子。三方土器大将の。御傍に差置は。御手
に取てヤイ山三。此土器を深草で焼はどふした謂じやなア。ハアヽかふもござりませふか。深
草はむしやくしやとした名なき共。焼た所でかはらけとなる。ハヽヽヽ。こりやあぢをやりおつた。
サアつげく」と引受て。「コリヤお国。此盃はそちへさすが。又呵る相人が有身じやないかよ。是は
あられもない事御意遊ばす。何のマア左様な事が。スリヤ男はないか。ムヽくよしく。然らば我等

（72ウ）

ふくするしや。いやといはさぬかための盃。一つ呑く」と。早舌の根も廻らぬ大将。傍にまし

くし不忽の大谷。「コリヤやい一学。何をうぢくもつけ顔。そちにも役目言付る。爰へ来て足をもめ」と。體を横に膝枕遉四海の主迚按摩。取身も立烏帽子。素襖の袖のまくり手に。そろく腰を現やたはい。「コレお国。是から我等が奥にするが。嬉しいかく但しはいやか。どふじやく」と身はなよ竹。「ヲヽ我君様のおなぶり。何ぼう左様に御意遊ばしても。何のマア私等風情。お酒の上のおざれ事。仇な恋路はわたしやいや。イヤ仇でない神ぞ八まん弓。矢神も照覧有。ヲヽ嬉し。其御詞か誠ならば」と早とけかゝる春の雪

（73 オ）

大谷が高笑ひ「ハヽヽ。いやモ我君様には手ごはき敵の城廓を。攻落す計でなく。女を落すも又御手練。イヤハア驚き奉る」る。詞に猶もたかいなく。「惣躰女といふ君は城にかたどつたものじや。此お国か様に。器量能美しう名を取た名女。城でいはゞ何所の城で有ふぞ。ハアヽ要害堅固の名城ならば。差詰此肥前の御居城でござりませふか。ヲヽマア居城ならば居城にせよ。其居城の本丸二の丸外廓の。固めをお国か形に准へて見ると。上着中着下着を着て。帯しつかりとしめた所。斯帯紐をしつかりしめて固て

（73 ウ）

は。譬籠る大将が女童でも。めつたには落にくい。ナント一学。此名女を口説落すには。どふして責たら落ふと思ふぞ。イヤもふ何としてく愚蒙短才の我等しき。譬日本の勢を催しても。口説落す事思ひも寄ず。其筈く。所を此久吉が寄手となれば忽落城。ムヽ其落城の御計略が承はりたい。サア今もいふ通り。何ぼ女童でも。要害の帯紐しめては。権威計で攻ては落ぬ。そこで詞を和らかふ和睦を入。何と我等が奥に成気はないかなどゝ。詞やさしうやりかけても。女の癖で気を廻し。何のマア嘘らしいと。迷ふ所でしんぞ

（74 オ）

八幡弓矢神も照覧などゝ。誓ひの詞は嘘八百．遉は女気。誠と心得最用心の帯紐も。解た所が二の丸。彼外廓を破却の心。上着中着の帯紐さへ。あつちの手から解すれば。丸はだかの裸城。其跡はずるくべつたり。我手に陥る謀。ナントきついかく」と。自慢咄しも逢坂や流石お国も計略に。すは落城と成果る。山三は横手てうど打。「さつても厳しい御計略。陥たお国様。大将の色事なれば日本国を一所へ。寄てお貰ひなされませ」と。そやし立られお国も笑顔。「サア上もない我君様のお情に預るからは。今死る共身の果報。

（74 ウ）

迚もの事にお添臥。申。くゆり起せど。揉るゝ人ももむ人も倶に漕出す白川夜船。只ぐうくの高鼾。寝息をとつくと伺ふ二人。しすましたり折よしと山三が眴を呑込お国。隠し持たる九寸五分。抜より早く起立大将。「ハテ心得ず。我身に過有ん時は己と音を出す千鳥の香炉。夫故肌身放さぬ香炉。今懐中にて音を出せしは。我を狙ふ曲者有。詮義せよ一学」と。仰にはつとつゝ立上れば。「コハ口惜や顕れし」と。山三も懐剣抜放し大将めがけ切付る。山三をてうど真の当。はつと驚くお国が小腕取より早く早縄に。二人を手もなく高手小手。いま

（75 オ）

しめらるゝ両人が。悲運の程そ是非もなき。大谷猶も眼をいからし「ヤア形にも似

ず我君を害せんとせし不敵やつ。何者にぞ頼れしか。但しうぬらが一存か。様子ぬかせ」ときめ付れば。大将しばしと押とめ給ひ。「此久吉を討ん為近寄たる二人の者。譬いか程責る共一応で様子はいふまじ。今宵は庭木に繋ぎ置明日急度糾明せん」と。仰にはつと大谷一学。庭木に二人を禁る。縄の結ひもくひ入計無念くと。身をあせる。拙き運と秀る運。香炉故に不思議の難。のがるゝ武徳久吉公。一学来れと召連て長台。深く入給ふ。既に其夜も。更渡り。庭木

（75ウ）

の梢しんくと小夜風つよく身にぞしむ。無慙やお国は夫と倶に。身を広庭の木枯に。ちりしく梅に花ならで。盛りをちらす我よりも夫の身にし思ひやり。涙の夜露裾袂しぼり。兼て見へにける。「ヤ山三様。嘸御無念にござりせふなア。誰有ふ松永大膳様のお子。靭負様共有ふお身が。有ぬ姿に身をやつし。夫婦館へ入込しは。父様の敵久吉を討て本意が遂たい計。其甲斐もなふ顕はれて。お前も。わたしも縄目の恥。元より覚悟の上なれば。悔む心はばけれ共。せめて敵に薄手も負せず。しかも敵の手にかゝり。やみく

（76オ）

と殺さるゝは。どふした因果な身の上ぞ」と。悔み歎けば山三も顔上。「亡父の仇を討んと思ひ。年月の憂艱難。仏神堪能有けるにや安々と館へ入込。久吉が傍近く。召出されしる其時は。天へも上る心地にて。早まつて仕損ぜし。是も武運の至らぬ故と。我身は覚悟極めて居れど。いとしいはそなたの身。よしない我につれ添て。一日安堵の思ひもさせず。ついに刃にかゝるのも。皆此靭負に連添故。嬉しい共忝共。礼は未来でく」と。跡は涙にむせびなき。お国は悲しさ有にも有れず。「勿躰ない其お詞。譬

（76ウ）

八つ裂車ざき。どんな憂目に逢ふ迚も。可愛男の為じや物。何の悔まふ勿躰ない。そんな事をいはず共。未来もかはらぬ夫婦じやと。云て聞して下さんせ。それが追善回向より。わたしや嬉しいく」と。寄添んにも身は叶はず。顔さへ見へぬ暗き夜の。闇はあやなし梅の花。木の根にどうど伏しづむ。涙は花の吹雪なり。始終の様子最善より。聞居大谷庭におり立。「ヤアほてくろしいよまい事。扨は松永が躰よな。久吉公を親の敵なんどゝは。胴より肝のふといやつばら。最早子細を拷問に及ばねば。明日迄待

（77オ）

ず。只今成敗。覚悟ひろげ」と立寄て。刀抜手も見せばこそ。いましめすつぱと切はなす。二人は恂り顔見合せ。「コリヤ我々が禁めを。シイ。声が高い命助る本望遂い。何本望を遂よとは。ホヽ切なる二人が孝心を感じ夫故命助けてくれる。スリヤ私共を御助け。ホヽ武士が詞に二言ないはさ。アヽ有難し忝し。サア女房」といさみ立。奥をめがけてかけ行を。ヤレ待暫しと押とゞめ。「大将の寝所には。大勢寝ずの直宿の武士。其中へ汝一人。行は好んで火に入虫。ホヽ其義はちつ共気づかひ有な。譬いか程直宿

（77ウ）

する共。某多年心をつくし。ならひ得たりし忍びの術。其術をもつて

安々と．忍び入て久吉が。首取はあんの中」と。悦びいさめばお国がとゞめ。
「ムヽ何ほどお前が術をなしい。寝所へ忍び入にもせよ。久吉が大事にかけ。
肌身放さぬ千鳥の香炉。さつきの様に音を出さば。又仕損じは
知れた事。マアくせかずとも思案はないか」といふに実もと黙頭山三。
いかさまそふじやと当惑顔。大谷すゝんでもつともく。其香炉
に音を出させぬ仕やうこそ有気づかひ致すな。ムヽ音を出させぬ

（78オ）

仕やうとは。ヲヽ千鳥の香炉に限らず。都て名器に不思議は様々。
其怪しみを除んには。蜀江の錦蝦夷錦。小金襴の小切を以。
名器のうへを覆ひ包めば。自然と怪しみなす事なし。或は名画
の掛ものにも。能金入の古切を遣ふも其謂れ。今久吉が所持の香
炉いか成希代のものにもせよ。蜀江の錦をもつて上を覆ふはゞ。
何条音を出す事有ん」と。聞て山三も打黙頭。「ヲヽ珍敷御教。
さはいへかゝる過急の場所。其錦有ん様なし。ヲヽ其錦あたへてくれん」

（78ウ）

と両手を己がふところへ入て引さく怪しの片袖。「是こそ教へた
蜀江の錦といふもの。是さへ覆へば心の侭。再び家を引おこし。必
武門に花咲すコリヤ餞別なり」と指出せば。追取て押戴き。「ハヽ
重々の御厚情。御恩はわすれぬ一学様。ヤアいらざる詞時移る。早行
やつ」といさめられ。浮木に逢へる盲亀の心地。イザ来い女房アイ
あいく。倶に嬉しきお国か風情。かいどり小つま勇み足。忍び入
こそあゆふけれ。跡見送つて一学が。一人ゑみして立たるところへ。

（79オ）

朝鮮国より注進と。呼はる声も矢を射るごとく。ふねを
みぎはにこぎつけてあがるや息もつぎあへず。「扨も味方の
兵船軍船。都合三千六百艘。釜山海につくやいな。加藤
小にしの両大将。阿修羅王の勢ひに。おそれわなゝき唐人原
とり出くに逃こもり大筒。石火矢釣瓶かけ。はなす鉄丸炎
のごとく。両将ちつともひるまばこそ。手もなく要害せめひじき。
それより行歩度三十里。登ねぎを暫時にせめとり。日本勢

（79ウ）

のいたる所せむるに取ずといふ事なく。追つけ王城開城府に
せめ入ん。御心やすかるべし」と大いきついで詞ふれば。「ホヽ遠路の船
路太義く。此おもむき我君へ申あけん。休息いたせ」とやり
過し。ぬきはなして大袈裟きり。すぐに死骸を。なみ間へ蹴込。
「ヤア身が家来の早水喜藤治。早く参れ」と言葉の中。
はつといらへて立いづれば。あたり見まはし小声になり。「こりやくく。
只今朝鮮ざい陣のものどもより勝軍の注進。それがし逐一聞

（80オ）

届けしが。よも知るましと思ひの外。中々案内委しき手配り。此

分にては王城とても心元なし。汝は急ぎ此早船にて朝鮮に至り。
釜山海へは着岸せず。直に江陵府麒麟縣それより間もなく
江原道水原郡に至るべし。是王城へ近道なり。若敵王城へ
攻寄ば。帝諸共太子を伴ひ。咸鏡道迄御供申せ」と。懐中より一巻
を取出し。「コリヤ此絵図を見ば。朝鮮国の抜道。近道隠れ里。手を取
て教ゆるごとし。早々急げ」に喜藤治が。畏り候と船へ飛乗櫓を押立。

（80 ウ）

跡しら波と漕出る。大谷一学跡見送り安堵の思ひに大紋の袖かき
合せ。しづくと。わゆむ後ろの一間より。「ヤアく船頭与次兵衛暫らく待」と声
かくる。恟りせしが見向もせず。聞ぬ顔して。行先に。俄に聞ゆるせめ太鼓。あ
やしと思へど障らぬ風情。立戻つて行過る。又もこなたの一間より。「ヤア日本ならぬ
外国の唐人。そこ動くな」と呼はる声。聞耳潰す大谷が。猶行先に又螺がね。
四方八方取かこむ。気色にちつとも騒がぬ一学。傍にらんでつ立ば。程も有
せず組子の大勢。我組留んと両方より。突出すことぢに事ともせず。

（81 オ）

くゞつてぱつしと踏落す。間もなく突棒さすまたのすまたくらふて。もぢり合ふ。長柄
は会釈も有ばこそ。寄を蹴倒しふみ飛し。残るは掴んで人つぶてはらりくと
打付る。人間ならぬ働きに。寄つく者もあらしこ共。一度にどつと。逃落
たり。相人なければ広庭に。大谷明て高笑ひ。「身を与次兵衛の唐人のと。覚なき
名を呼といひ。組子にかけて取んとは。ハレ烏滸がましや」と睨付るこなたの障子。押開き。
立出る加藤正清。異国退治の出陣姿。鬼をもあざむく。其勢ひ。悠くと御
慰に向ひ。「朝鮮国地理の案内。事明白に相しれ。さぞ我君の御

（81 ウ）

満悦」と呼はる声に大領久吉。装束改め。しづく立出。「ホヽ小西が
所持する細見の絵図。先達て我手に入共。山川地理の行程
迄。和国にしらぬ土地なれば。其案内紛明ならず。心もとなく思ひしに。
其国人が所持の絵図。今某が手に入も。ひとへに加藤が働き故」
と。悦喜の詞に正清進んで。「某方寸の術を持て。いまだ渡らぬ朝
鮮より。勝軍の注進などゝ。跡方もなき軍の咄し聞て誠とうろたへ
騒ぎ。こちから問ぬ地理の案内。其上絵図迄持せやる。其家来め

（82～88）

を打放し。絵図をこつちへしてやつたれば。直にこれより出船。朝鮮国を
切取は此。正清がしゆりに有。門出の血祭りに外国の風来人。
いで首取ん」と。詰寄ど。ちつとも騒ず嘲笑ひ。「絵図を取ふが。朝鮮
を切取ふが。そりや此方に構わぬ事。此一学を異国人とは何の戯言。
ホヽ其あらそひをさせまい為。松永が躰と偽る某は。久吉公の家臣
小西弥十郎行長是に有」と。以前に替る軍の出立。傍に引そふ
女房も。かはる姿の衣紋つき。夫と倶に立出て。「コレく大谷殿。香炉

（82～88）

の音をとめさせせんと。最前の此片袖。まがひもなき唐人衣装。是

を肌着に着て居るこなた。唐人といふ慥な證拠」と。言れて大谷言
句も出ず。「ムヽすりや松永が躰といふたは。ホヽ顔見しられぬを幸
に。とくより夫婦が姿をやつし。お国歌舞妓と成たるも。そちを見
出さん為計。最早遁れぬ覚悟せよ」と。詰寄よる血気の両人。大
将暫しと押とゞめ。「面躰に痣をこしらへ。船頭与次兵衛と姿をやつし。
又面躰の痣をはがし。下部と成て我に奉公。眼中といひ頬魂。

（89 オ）

曲者と睨しゆへ。態取上立身させ。傍近くさし置も。そちが素
を見出さん為。某が術に落入。今顕はれし異国人。いかなれば秀吉に。
何の恨みが有やらん。語れ聞ん」と有ければ。こなたは怒りに髪逆
立。無念の瞪くはつと見ひらき。「何恨みとは空々しい。かく顕れしうへ
からは何をかつゝまん。我こそ朝鮮李昷王の臣下。武林官といつし者。
此土に来りし其子細。語つて聞せんよつく聞。往昔神功皇后我。三韓を
攻なびけし。恥辱は犬打童迄。知る事なれば語るに及ばす。それよりつゞ

（89 ウ）

いて一百余代の其間。三十余ヶ度の戦ひも皆我国の負軍。又もや
此度大領久吉。人数を向ると阡陌の風聞。我王城に聞伝へ。すはや帝都
の用心ぞと。数多の官人官女迄。騒げば誰がいふともなく。朝鮮国の八道
迄我もくと逊支度。氏百姓は我一に家財雑具を山林へはこぶ
もつらき足弱車。親を尋ね子を失ひ。老も若きもちりくに歎
きまゆふ声々は阿鼻叫喚の罪人も。かくやとばかり聞捨て。一先帝は義
州の方。二人の太子お后は兀良哈の境迄。御身を忍ばせ申さんといふ闇

（90 オ）

くらき。山と坂馬も車も用意なく。徒や徒跣の夜の道。谷に下。
峯をよぢ。牡丹台を踏ちらし。鴨緑江を渡るも有大同江には船渡し。
乗後れしとせく人も。せかるゝ人もばたくく。水におぼれて幾千万。
数も限らぬ国の騒動。元はといへば大領久吉。軍を向んず風説より。
かゝる騒ぎと心付。久吉さへ討とらば。国の患ひは遁れんと。数多の臣
下を抽でゝ扨こそ此土へ渡りたり。されども智謀の大領久吉。なみ
くにてはたよられずと。船頭となり下部となり。計る。くと思ひしが。皆計ら

（90 ウ）

れし我身の不運。エヽ口惜や奇怪や」と。勇気にさへたる両眼に。無念
の涙はらくく。霰たばしるごとくにて大地に。蜂の巣をなせり。涙払ふ
てどつかと座し。「迚も本望達せぬ上。生て再び本国へ。何頬さげ
て帰るべし。日本武士を見習ふて。腹かつさばくは我国の李昷王へ言訳
ぞ」と。既に覚悟と見へければ。御大将押とめ給ひ。「ホヽ天晴成武林官。此
久吉を討ん為。一人此地へ押渡るは。不敵とやいはん。ホヽヽヽ忠臣とやいはん。
健気なる汝が魂。唐土日本かはれ共。かはわぬものは忠臣義臣。今の

（91 オ）

命を存命て。始めのごとく久吉につかへんや」と。所存を見透す名将の。

情もこもる一言に。見向もやらす頭打ふり。「此士はしらず異国には二君に仕へぬ性根をもつて。忠臣義士の誉れを取。夫を背いて奉公せば。砕いた忠義は水の泡。目前大領久吉に敵対したる船頭与次兵衛生置ては掟が立まい。愚や与次兵衛。摂州住吉にて。我船を覆さんとせし与次兵衛は。早速に討取。生国豊前の沖にて刑罰致せは。与次兵衛が瀬戸と世の人の知所。又此度朝鮮征伐は私の心に有ず。禁庭より

(91 ウ)

の勅諚と。我又多年の懇望此日本は小国なれば。是迄武功の諸大名へ。褒美にあたへん国郡。土地狭ければ心に任せず。去によつて朝鮮一国切随へ。戦労の面々へ我心に飽たる程。分地拝領其上は。朝鮮国も日本の風義と改め我も又彼地に隠居の心さし。併汝が忠義に免じ。征伐もとゞめたけれど。禁庭の勅なれば。一旦人数を向るといふ共。よき程に和睦を入国王李昖を助れば御辺が忠義も立所に朝鮮国も穏ならん但し又。久吉か詞を背き切腹せば。一国八道切尽し。永く日本の奴とせん。サアくく返事

(92 オ)

いかに。何とく」と正清小西。のつぴきさせぬ鋏ぜめ。さずがに猛き武林官。ハハヽヽはつと飛しさり。「物数ならぬ某が。寸志の忠義を思召。我大王の一命を。助んと有からは。此上の本望なし。何か違背仕らん。かゝる仁義の御大将御奉公とは恐れ有。と有て帰国のの望みもなし。今より日本にとゞまつて。武林の二字を其侭に。武林何某と心も名をも改めん」と。しさつて拝する武門の鏡赤城義士と名も高き。四十人余の其一人武林和多七が。先祖は是としられたり。大将悦喜の御声高く。「ヤアく両人。只今

(92 ウ)

武林に約せしごとく。其心得にて出船し。日本武備の名を上よ」と。仰にハツト両人が御前を勇立か弓。健て御無事で手柄して早ふお帰りなされやと。尽ぬ名残のかずくをいはぬ心の女気に。泣音をかくす磯千鳥彼蜀江の錦の袖。翻して凱陣有と。勇る唐人両将は得手に帆かけて出ふねの。早乗出す。青海原家々の船印。吹貫小籏へんほんと。靡随ふ大将の威風りんく武林官。名残おしげに延上り。見送る小磯船かけも次第くに遠津海四海。万里のなエイく。エイくヨホンホ外迄も。真柴。大領久吉の武徳は。光りかゝやけり

(93 オ)

第五

漢の簫何にたくらべて味方の兵糧運送の。役目を守る岸田勘解由御大将に引添て。朝鮮国の軍の次第日々の便りを松浦潟。藤津の浦に出張を構へ。待年月も立浪の。磯辺に屯をなし給ふ。久吉仰ける様は。「いかに勘解由。此間の注進には大明の援兵。廿万騎鴨緑江を打渡り。開城浦の要害に楯籠るとの知せ。何様朝鮮一国は切尽す共南京の大敵に当りがたし。急ぎ加勢を差こせよとの注進。今日四海を掌に握ると

(93 ウ)

いへ共。帝都の守護として過半は都に残し置ば。重て向はん人数もすくなし。口惜や

小国の大日本。此上は久吉直に押渡り一戦の鉾先に。雌雄を決する一軍。
岸田つゞけ」と気早の大将。御座を蹴立立給へば。勘解由暫しと押とゞめ。「御短慮成御
仰。元来当今の後見たる御身として。遥の波濤に御出馬有ば。誰が残つて帝
の御守護。只此上は大明の加勢何万人入来る共。何程の事や有ん去ながら。朝鮮
李昭王の命は御助有べきと。先達て武林官に御契約有と承はり則書翰を以
味方の在陣へ申送り。彼土に置て評義の上。今日本久吉公の御仁政を悦び。御扱ひを入

（94 オ）

べしと評定一決仕る。今日御和睦の使として。沈惟敬と申唐人。当所参上の手筈
に候間。出陣を御と止り候て。何卒和睦の御扱ひ御承引候はゞ。我君の仁徳を異国迄聞
伝へ。長く日本の御誉此上や候べき」と。申上れば御大将何か心に叶ひけん。ほくくと諾き
給ひ。「ホヽ和睦の義を取結び。今日使者が当着とは。勘解由が計ひ出かしたく。併一旦
人数を差向しも。先帝の勅諚今より昔に相かはらず。貢物を捧なば。則叡慮も立所に。
我詞も立道理。沈惟敬が着岸次第。我本陣に同道せよ。対面の上誓紙を書
せ。異国へ向し諸軍勢。凱陣は又其上久吉が計ふ旨有。岸田は残つて同道せよ」と言渡し

（94 ウ）

陣所をさして還御有。跡見送つて岸田の勘解由。待間程なく着岸の。知せは異国の
売鉄砲。遥に船を乗捨て。しづく歩む沈惟敬。手つから捧る台の物。勘解由が前
に押ならべ。兼成和議沈惟敬。入浸来く候」と。一揖すれば。「ホウ遠路の渡海太義
く。先達て書通を以て通ずる所主君大領へ申上。承引有て我らも大慶。シテ申合せし
ごとく。数多の人数を同船しかサ何とく。ハアヽ其義はちつ共気づかひ有な。兼々返翰に送し
通り。南京から朝鮮へも毎々入込商ひ唐人。是迄に日本へも渡海致した沈惟敬。勘
解由公のお頼ゆへ。同船の人数は三百人手配迄ぬかりなく。ムヽ夫は重畳。兎に角小国の大日本。

（95 オ）

過半の人数は皆朝鮮。残つた味方は此勘解由。さすれば無勢の此時節。折を見
合せ大領久吉。只一思ひに。ナ合点か。いかにも左様。用意致した鴆毒で。シイ高いく。生得茶を好
大将なれば。薄茶に調て只一口。跡は勘解由が飲ほす四海。幼稚躰捨丸もぎやつといはし
て仕廻を付る」と。岸田が工悪事の相槌。打かためし此箱に。仕かけ置た烽火台。人数を集る相
図の狼煙。時日を移さず勘解由様。ヲヽ尤と抜放し。はつしと打たる刀の焼刃。石に当るかとたん
の拍子。ばつと燃立相図の太鼓。波に音てどうくく。すはやと見る中出くるは味方に有で加藤正清。
小西行長手の者随へどつとかけ寄。「ヤアく勘解由。沈惟敬と心を合せ。和睦に事寄御大将を討す叛
逆。

（95 ウ）

早唐人めは人数を連釜山海を乗出せしと。聞より両人言合せ跡をぼつ付乗抜て。毛唐人原一々に切沈
め御大将の下知を受。かたはしうぬらを搦めに来た。遁れぬ所じや尋常に腕を廻せ」と呼はつたり。
扨はと勘解由沈惟敬。もふ百年めと切てかゝる。ゞちよこざいなと踏倒し伝手に二人を高手小手。い
ざ本陣へ引立て御前に置てなぶり切。無念とあせる沈惟敬。岸田が悪事顕はる。荒磯波風打治り四海
太平万々歳。千秋楽の代々かけて。竹の末葉も豊成。五穀成就民繁昌栄る。家こそ。久しけれ